

湘南大庭

ふるさと歌留多



2001年10月

湘南大庭わがまちと文化を考える会



「湘南大庭 ふるさとかるた」は2001年「湘南大庭わがまちと文化を考える会」の企画に賛同された多くの方々から、この地への熱い思いにあふれた句を寄せていただき、その中から選定された47句により出来上がったものです。

同時に「ふるさとかるた」の存在をより多くの皆さまにお伝えすることを目的に、別途、同内容に写真等を加えた様式で、小冊子という形にも纏められております。

今回はデジタル資料としてこの47句を紹介させていただき、あわせて小冊子中に記載されている各々のかるたの説明文を併記させていただいております。

◎ 目次の使い方

目次：①～④



読みたい「かるた」に
マウスのカーソルを
合わせクリックする。

◎ 動作ボタンの説明



ホームページ（3頁）へ移動



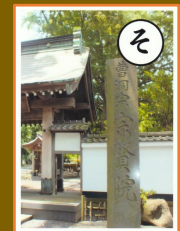
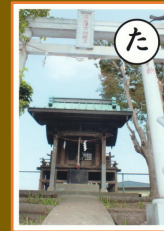
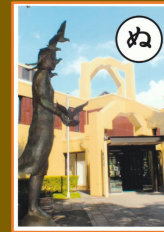
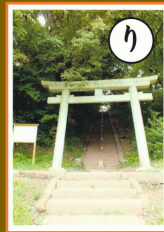
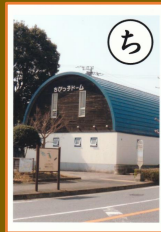
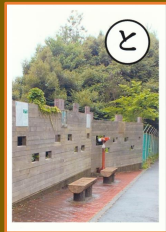
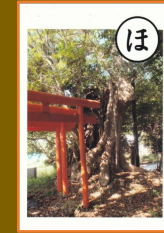
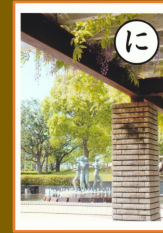
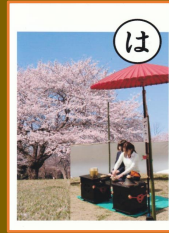
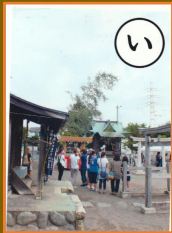
前の頁へ移動



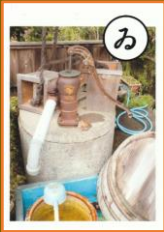
次の頁へ移動



目次：い～う



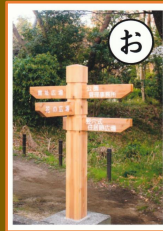
目次： ゐ ～ す



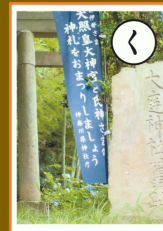
ゐ



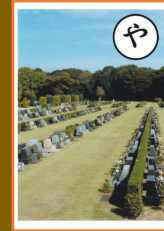
の



お



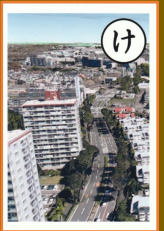
く



や



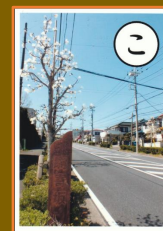
ま



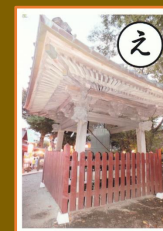
け



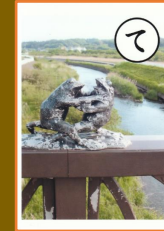
ふ



こ



え



て



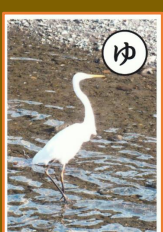
あ



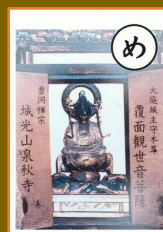
さ



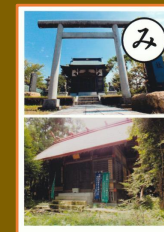
き



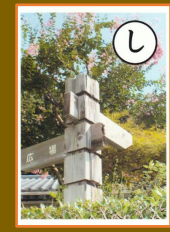
ゆ



め



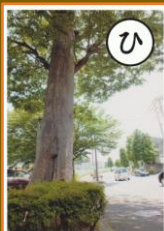
み



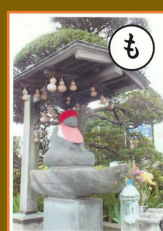
し



ゑ



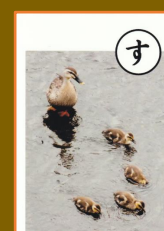
ひ



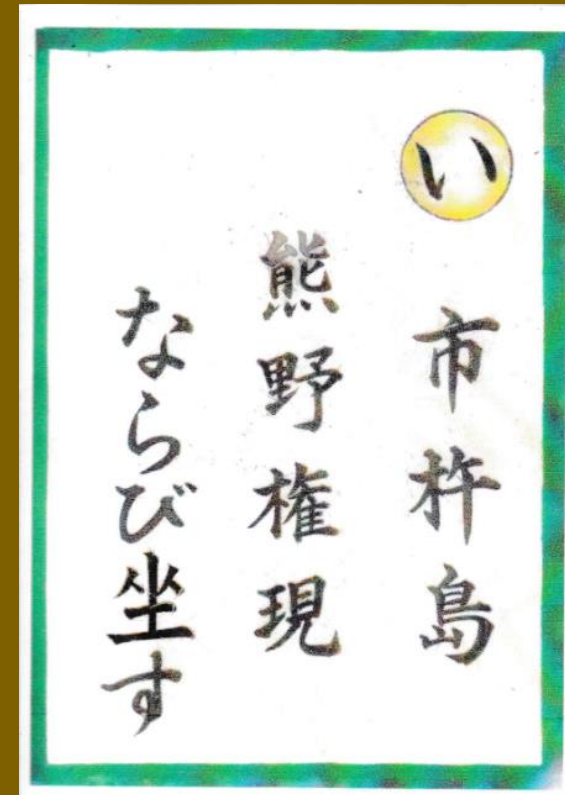
も



せ



す

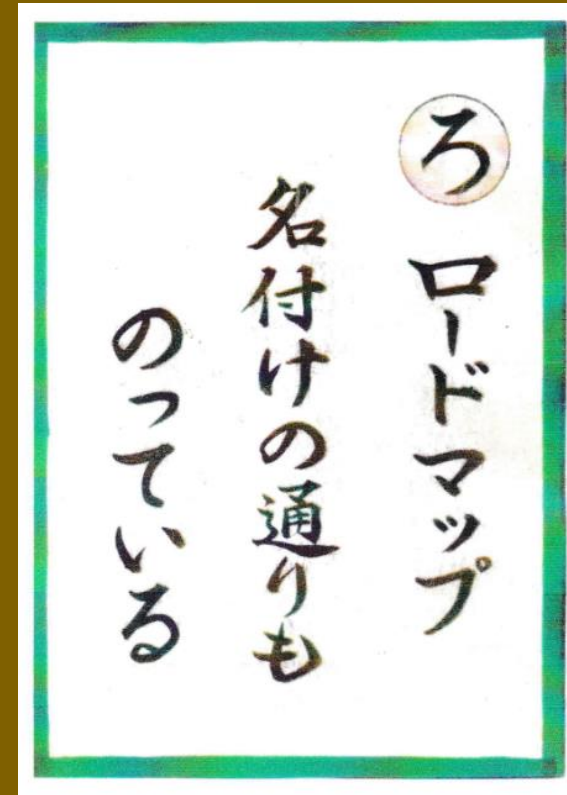


市杵島神社の祭神は市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）で寛永（1624～44）の頃この地を知行した加々爪氏悪政に苦しんだ農民達が神仏の力にすがると棄財天を勧進したところ悪政凶作が改まり幸福になったとの伝えがあります。

熊野権現の祭神は熊野久須比命（くまのくすひのみこと）で北条時頼のこの息災と関東の武運長久を祈って建立した聖福寺跡ともいわれています。

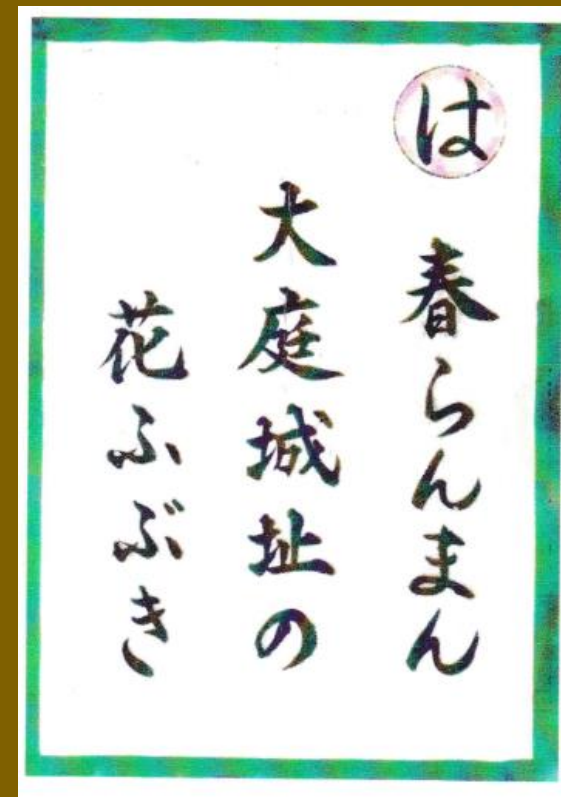
昭和53年に区画整理事業により北の谷のこの地に併せ祭られています。





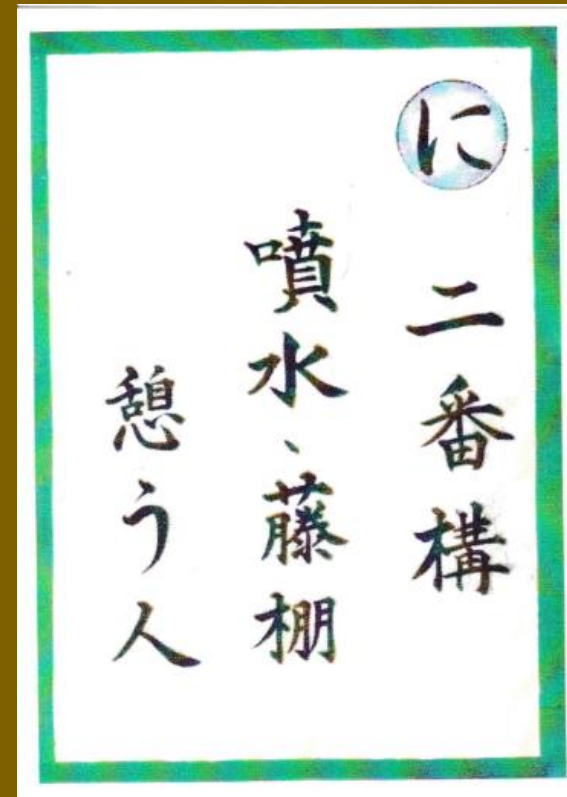
湘南ライフタウンと言う私達の住む街の主要な通りに名前を付けて、縁あって住んだこの街に愛着が湧くように、と平成元年から二年かけて「湘南大庭の街づくりと文化を考える会」が住民の皆さんに名付け親になってもらうよう公募した。5つの通りに多くの名が集まり、選考の結果を、ふるさとまつりで来場者にも投票してもらい入選作を決定した。それが現在の「中央けやき通り」「いちょう通り」「城下通り」「かえで通り」「駒寄坂」だ。藤沢市では、それぞれの通りの所々に立派な金属の標柱を立ててくれた。全国版の道路地図にも通り名が掲載されている。これが、私達の街で人々の歩く通りである。





湘南ライフタウンの形が出来かけた頃、大庭城址はまだ人も入り込めない鬱蒼とした丘陵
 だった。ライフタウンの形が整うにつれて大庭城址も徐々に姿を変え、いつの日か今のよう
 な素晴らしい公園に変身した。緑と芝に蔽われた美しい公園。大人も子供も安心して寛げるよ
 公園。のどかな景観があちこちに広がる。いつの頃からか桜の名所として人々の噂に登るよ
 うになった。インターネットでも紹介されるようになった。そして地域内は勿論、地域外か
 らも多くの人が集まるようになった。春には辺り一面に桜が咲き競い、そして花吹雪となっ
 て散ってゆく。花の宴は終わり、人もそれぞれに去ってゆく。そして大庭城址は再び新緑の
 美しいのどかな姿を取り戻す。

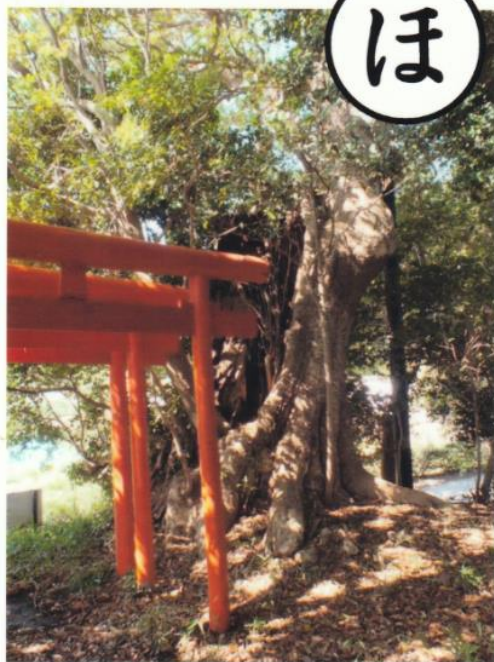




この土地には、大庭城の攻防華やかな時代の地名が多く残っている。そのひとつである二番構えと言う字名のある所に、噴水と乙女の群像や水のニンフ、遊ぶ子供などの像とせせらぎ風の流れがある公園がつけられた。北よりの広場には、築山とアスレチック遊具があり、幼児と父母の笑い声が絶えない場所になっている。

夏には水遊びもできるし、春には、中央広場の藤棚に、市の花「藤」が長い房に満開の花を付けてくれるのもうれしいことだ。この公園に接している駒寄坂のこぶしの花も、中央けやく通りの新緑、紅葉も、それぞれ季節の彩りを添えてくれる。





ほ

ほ

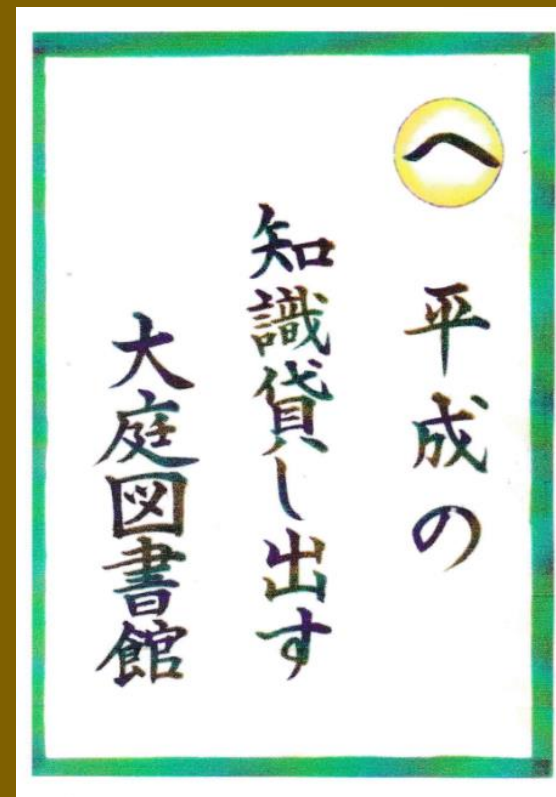
誇り高き

タブの木一本

谷守る

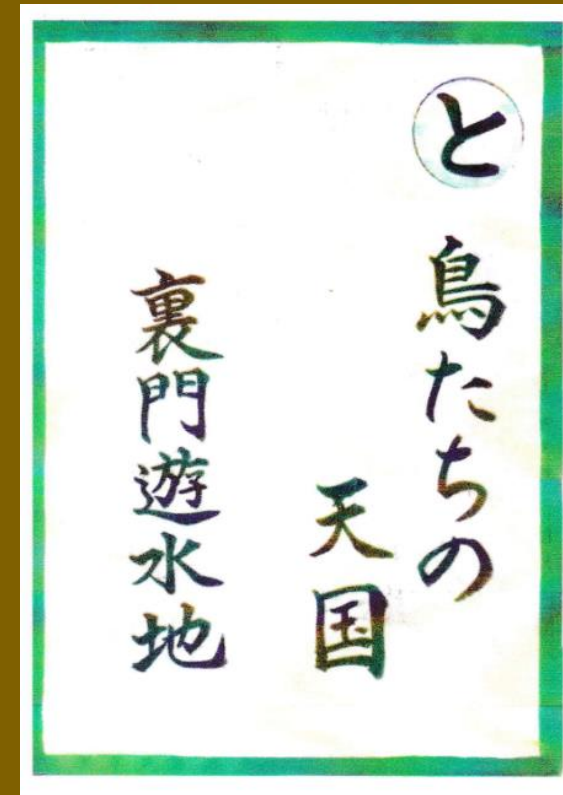
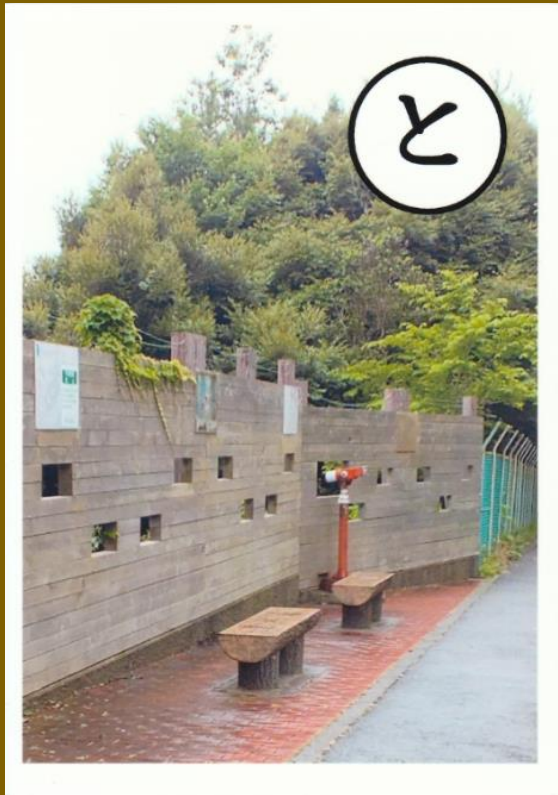
舟地蔵公園の南、芙蓉カントリークラブを背に広がる集落は、谷（だい）と呼ぼれ、名
 前の魂を祭った稲荷神社がある。樹齢は優に三百年といた。往年の姿から、や
 かにいう。爾来、巨木は、この風にも、この集落を守りぬいた。恐らくこれ
 さいてくれ。先年、大風集落を守りぬいた。往年の姿から、や
 高さは今も失われていない。恐らくこれから





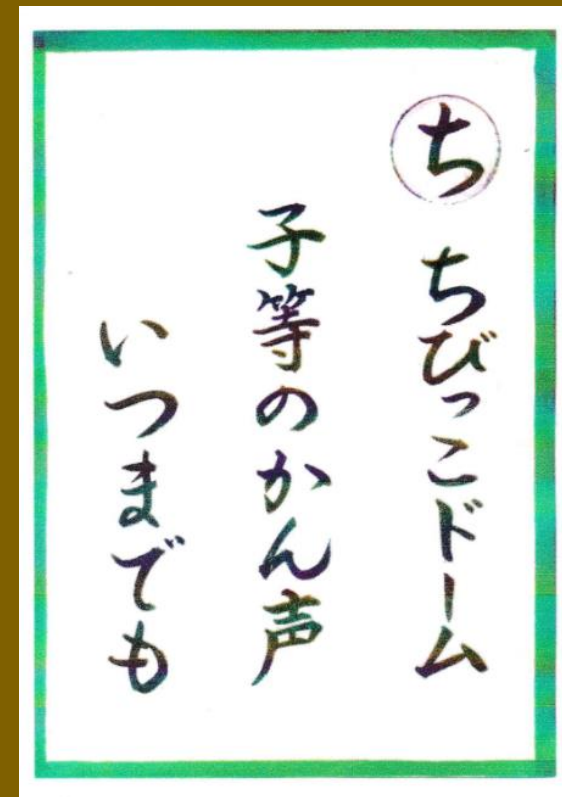
待ちに待った四館目の図書館が、大庭に出来た。子供の本も広々としたスペースでゆったりと選べる。老若男女も様々なジャンルの書籍を選び、閲覧でき、借り出せる。雑誌コーナーも、若者向けコーナーも豊富だ。他館の蔵書もリクエストできる。人々は、そこに新しい知識や学問を身に付けようと集まってくる。湘南大庭の公民館サークルが使える部屋や掲示板があることもユニークだ。湘南ライフタウンに知的なへそが出来た。





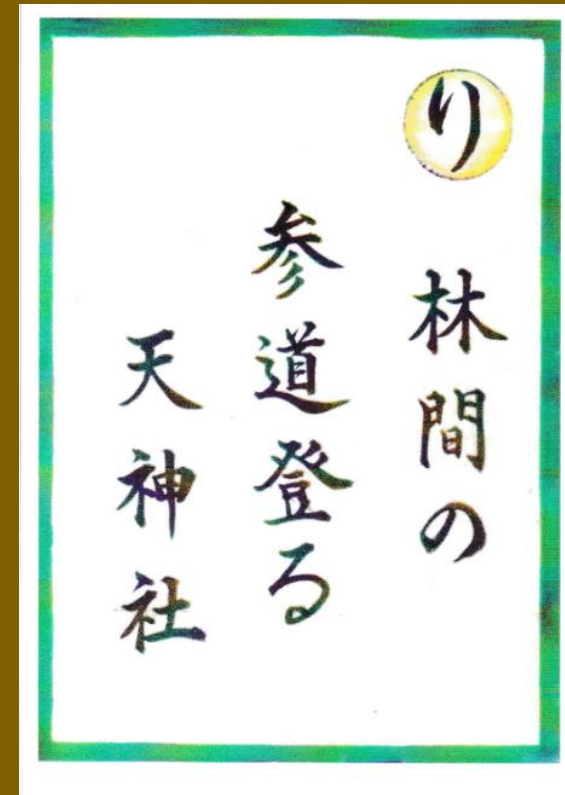
湘南ライフタウン造成時の計画では、多目的スポーツ広場になるはずだった。地域のスポーツ愛好者は期待して待った。工事途中で水が溜まり湿地になって、そこに鳥が集まった。周囲がフェンスで囲まれていることもあって、犬、猫が入らない。天敵がいないせいも、多くの種類の鳥が、天国とばかり住みついた。自然観察のグループが貴重な場所として注目した。散歩の途中で、備え付けの望遠鏡でのぞく人も増えた。かるがも親子も、尾長も、雉子も、ここが我が家だ。まさに鳥達の天国となった。





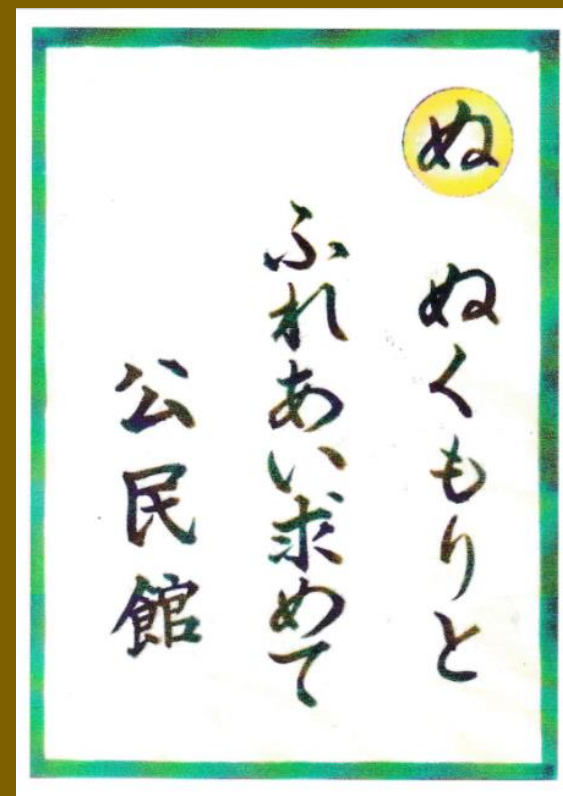
平成元年4月22日にオープンしました。市内に17館ある中で9番目に建設されました。正式名は大庭子供の家です。愛称は大庭小学生徒に考えてもらい、上田健太郎君の「ちびっこドーム」に決まりました。地域の子供たちが身近な場所で自由にのびのび遊べるようにと願って建設されました。公園と異なり雨が降っても寒い日もいつでも安心して遊べます。日常は2名の方が子供の遊びを危なくないよう見守っています。休館は第3日曜日と年末・年始のみで、子供の家まつり・クリスマス手づくり・豆まき等行事も多く催しています。10時～5時までオープンしています。小学生のいない午前中は幼児づれのお母さん達のふれあいの場になっています。





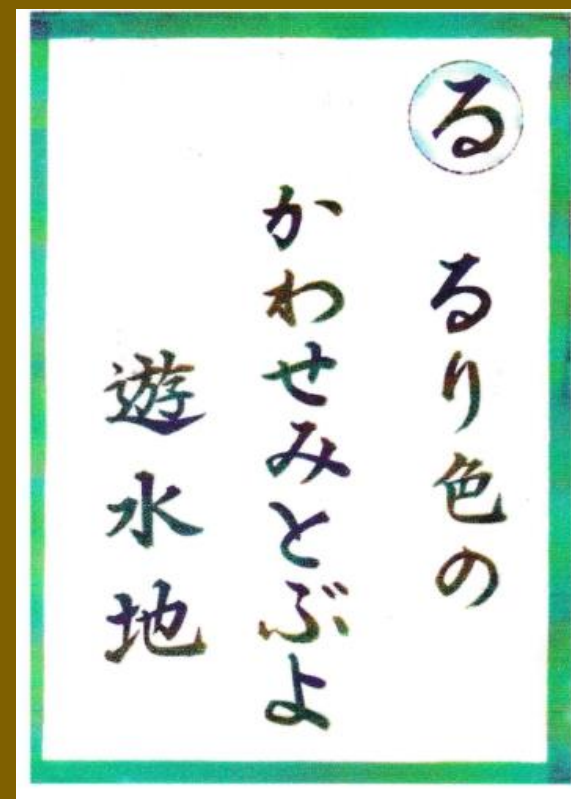
表郷の「天神社前」バス停から東に向かって約四百メートル。つき当りの山の上に通称「天神様」はある。入口の鳥居をくぐると、ならやくぬぎの林の中に、いきなり八十八段の石段が屏風のように立ちふさがる。これを一気に登り切ると息切れがするが、登ってから木の間がくれに降り返る引地川や城址公園の風景が実にすがすがしい。天神社は千年近くも前の延喜式に「相模の国十三座の一」と記されたほど由緒ある古社。昭和三十年代までは九月十三日の例祭日は幟を立て、大庭や稲荷や城南の氏子が太鼓の競べ打ち、芝居や神楽を奉納して、一晩中境内を賑わしていたものだ。





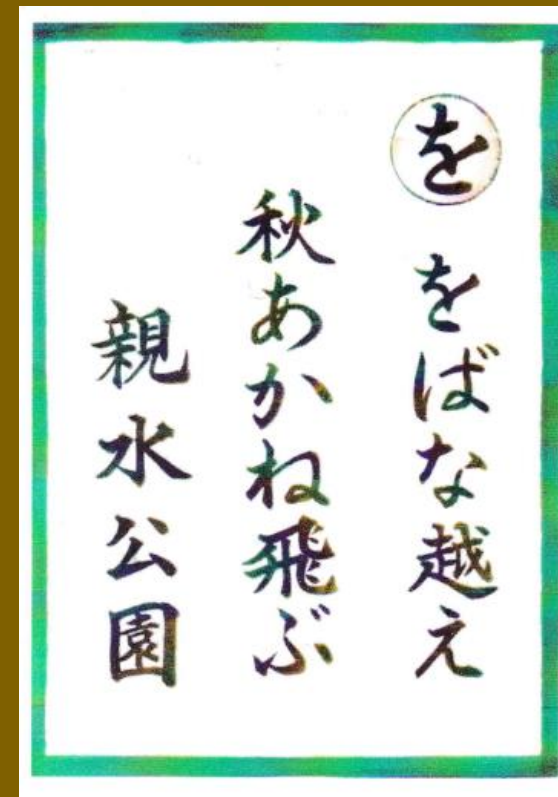
建物のユニークさもさることながら、100以上のサークルや団体が利用している市内有数の公民館が、湘南大庭公民館だ。学ぶ、遊ぶ、鍛えることを通じて人の輪ができ、かけがえない友を得る。さらに新しいサークルが生まれ、また人の輪が広がる。公民館はそのためにある。また、10月には建物内外をいっぱいに使ってふるさとまつりが行われ、バザーも模擬店もサークル発表などもあり大賑わいだ。藤沢市の西部の「湘南大庭」に住んで、ぬくもりとふれあいの街が実感できることは幸いだ。





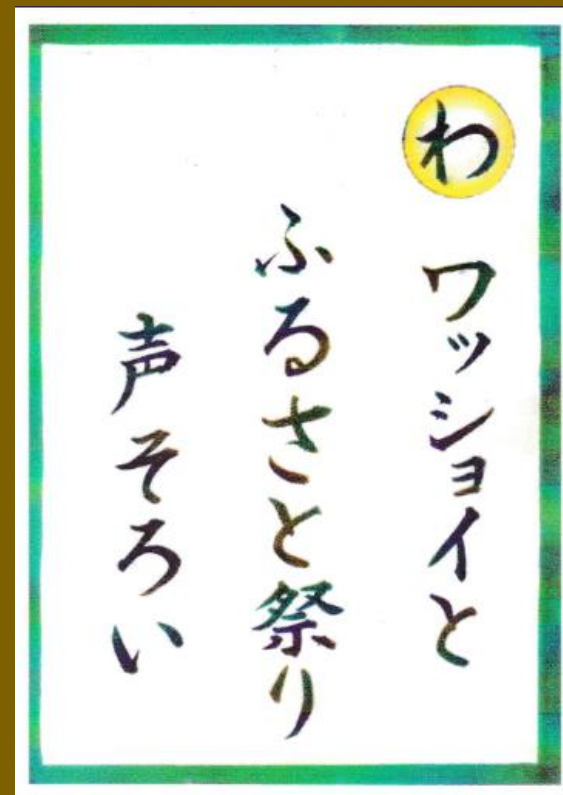
「カワセミ」は1992年10月1日に藤沢市の鳥に制定された。「みどりと太陽と潮風のまち藤沢」にふさわしい鳥を定め、野鳥を通して自然や緑の大切さを理解し、市民意識の高揚をはかることを目的に「市の鳥選考委員会」が15種の鳥を選び、市民からの投票の結果得票数5位でありながら、明るさと清潔感が藤沢のイメージに合い羽のグリーンがみどり、お腹のオレンジが太陽、背中のブルーが海の色を象徴している点と、生息地が環境浄化の指標になる点が主な理由で選ばれた。姿は全長が17cm位で体に比べ頭部と口ばしが大きく、尾羽は短い。「飛ぶ宝石」とも言われる美しいスズメ位の小鳥で、チィーとなき、この近辺では、大庭遊水地、大庭裏門公園等で観察できる。





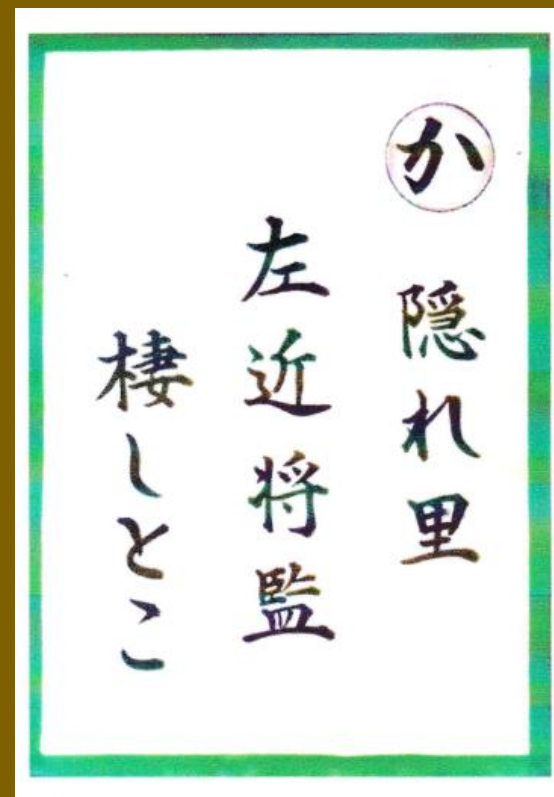
をばなというのは、すすきのことです。お月見のときにお団子などと一緒にかざりますね。秋になると、白い穂が風にゆれて、お日さまにきらきらと輝いているのを見たことがあるでしょう。引地川親水公園には水辺の植物や、昆虫などを、木製の橋を渡りながら楽しむことの出来る湿性植物園や、藤棚、ツツジの丘、桜並木、親水広場、水と石の広場などがあります。タコノアシといわれる秋になると、花や果実のつきかたがまるで蛸の足のように珍しいものや、ゴキズルという星のような花を8から10月につける湿地植物も見られます。白いすすきの穂、そして秋あかね、親水公園のとても静かな秋の風景です。





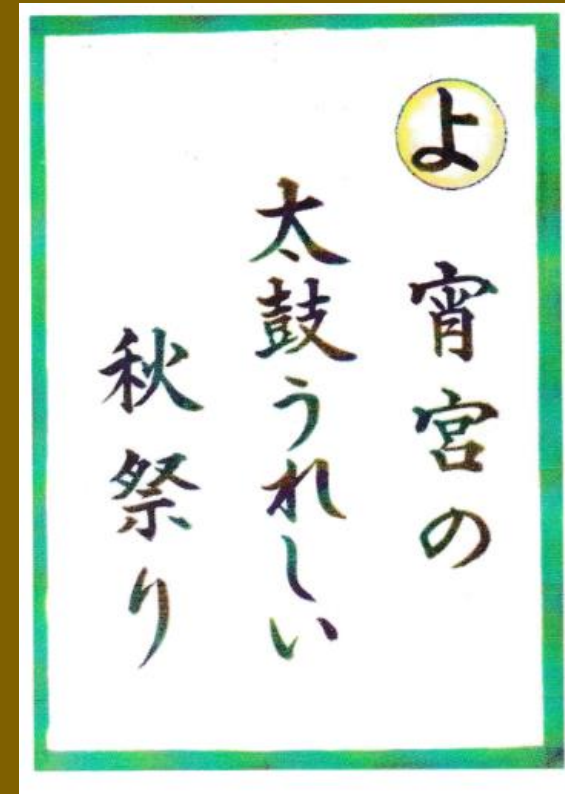
毎年10月末に開催される「湘南大庭ふるさとまつり」は湘南大庭地区最大のイベントです。「子どもたちに伝えようふるさとの文化」をテーマに日頃公民館を中心に活動しているサークル団体の発表、こども手づくりワールドコーナーではお年寄りからこどもに伝統ある遊びを教えます。屋外では模擬店など多数出展します。神輿や山車おはやしもまつりを盛り上げ地区内外の住民の交流の場として賑わいます。21世紀のテーマは「みんなでつくろう ふるさとの文化」、さらに充実したイベントとなることでしょう。





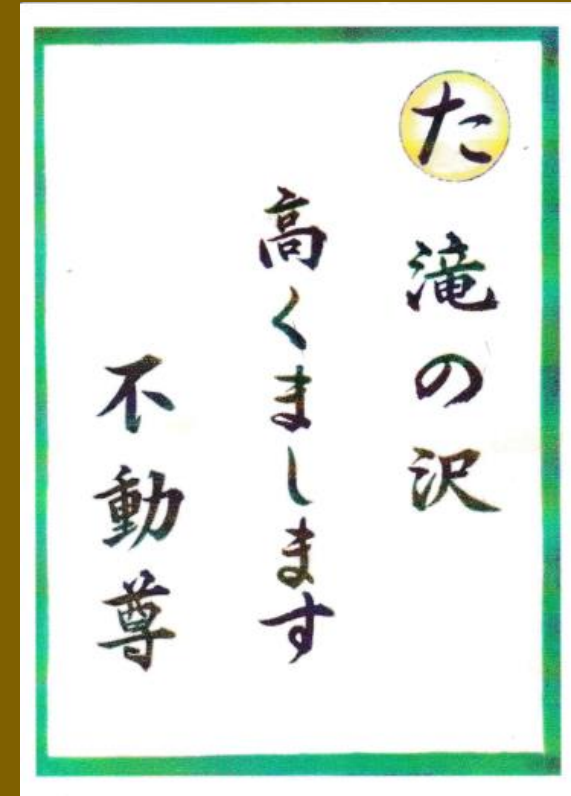
その昔隠れ里は宗賢院の南側、少し引込んだ山の根にあったという。その後一山越えて芙蓉カントリーの南麓に集落を移したのは、日当りの良い耕地を求めてのことだろうか。隠れ里には杉山性が多い。その一人は、戦前に笹や灌木に蔽われた山中に先祖の墓を見つけたと語った。忘れぬように書きとめてきた墓碑銘には次のようにあった。「杉山左近将監（すぎやまさこんしょうげん） 覚応院秀山道清居士 天正十八年九月二十九日 真空院玉清妙月大姉 天正十三年五月一日」左近将監といえは朝廷の要職である。戦国の末期にどんな都落ちの理由があったのだろうか。今はその歴史も苔むして定かではない。





日本の祭りには、春夏秋冬それぞれあるが、秋の祭りは、気候もよく米を初め多くのものの収穫の時と重なり人の心を豊かにする。秋祭りの背景には収穫に感謝する気持ちがある。遠藤の御岳神社の例祭は九月十五日で、自然の恵みに感謝して芝居を奉納している。秋祭りには、ここから嫁いだ人や他の処へ出て行った人親戚等が集まって顔合わせができる年中行事で楽しみにしている。宵宮とは、その前夜祭を言い、澄みきった夜空に太鼓の音が響きわたり、心おどらされる。

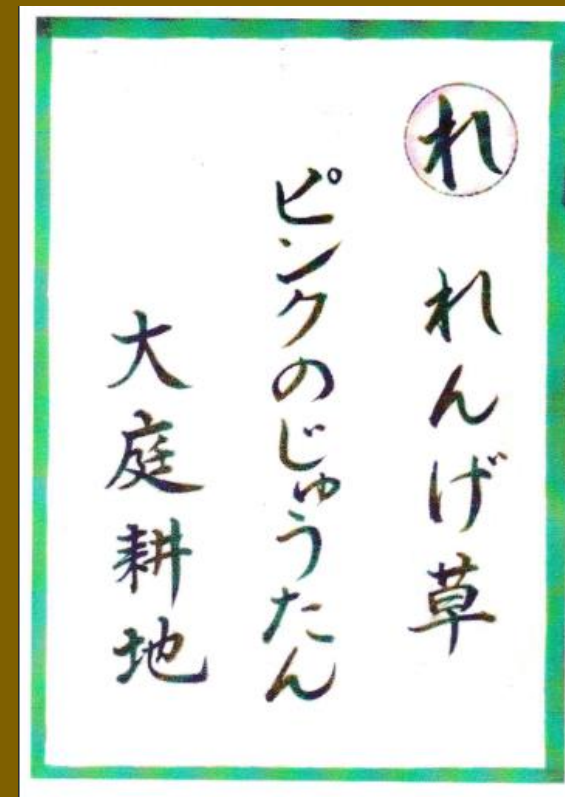
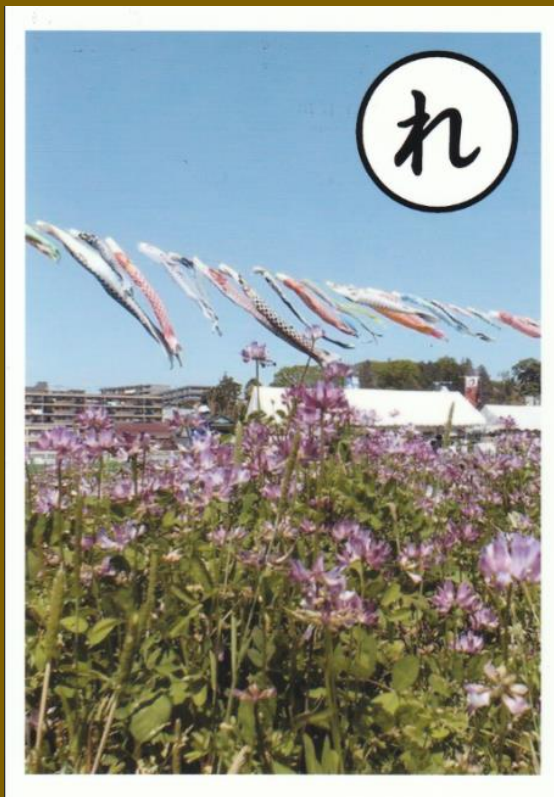




瀧之澤不動明王は、遠藤矢尻地区の小宮で湘南ライフタウン開発にあたり元のままの位置に残されたもので、周囲の分譲地より高くなっています。御本尊は、火焰後背型の素朴な石造であるが、ご気性の激しい立ち不動尊である。宝永二年（1705）二月寺山文右衛門が祀ったと伝えられています。

開発前は、昼なを暗い森林で、矢向大地からの地下水が一筋の瀧となって落ちていた淋しい所だったようです。残念ながら今は枯れてしまいましたが、霊験あらたかな不動尊としてしたわれ、地元の人々に信仰されています。

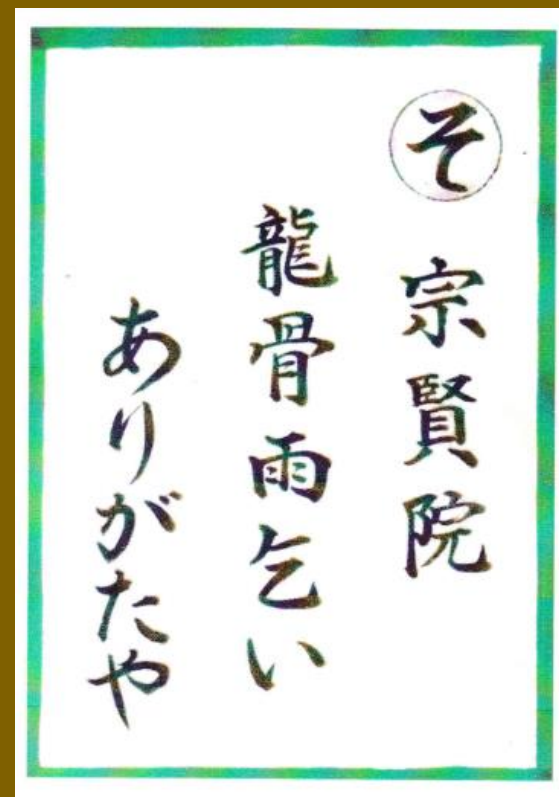




耕地というのは、川が曲がりくねっていたり深くて田んぼの仕事のやりにくい所を整理してきちんとした作業のしやすい畑や田んぼにすることです。引地川の両側は昭和32年に耕地整理事業が完成し、整然とした水田地帯になりました。そして大庭城あるいは大庭館にちなんだ門先・根下・城下といった名前がつけられました。

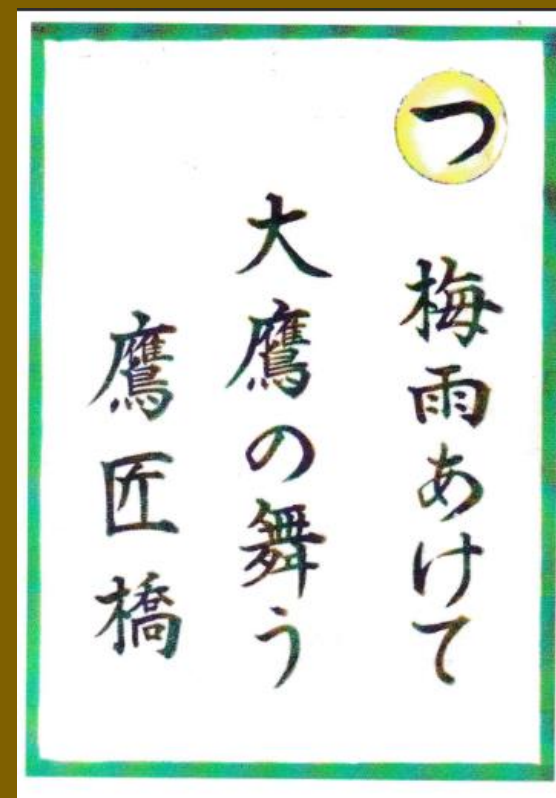
れんげ草は、昔は牛や馬の飼料にしたので、沢山蒔かれていたのでしょうか。今はどうでしょうか。れんげ草をつんで冠や花束を作って遊んだり、ピンク色のじゅうたんに寝ころんで遊んだ子供のころが懐かしく思い出されます。





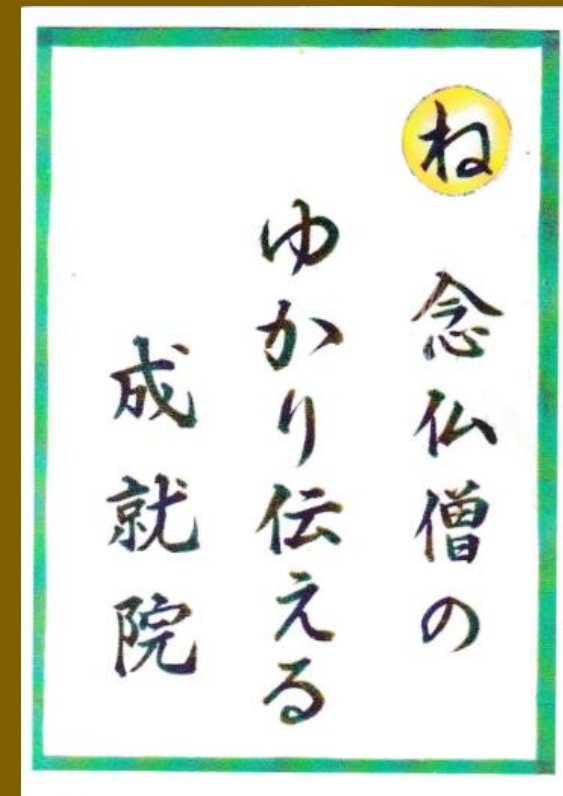
昔々、大庭の宗賢院にととてもえらいお坊さまがいらっしやいました。ある年のことです。日照りが続いて、畑も田んぼもすっかちはお坊さまから乾き地面はひび割れ、野菜も稲も、もう枯れそうになってきました。村人たちは、毎日空を見上げては、雲ひとつない天気がうらめしく、どうしたら雨が降ってくるのだろうと、悩んでいました。「そうだ、雨乞いをしよう、お坊さまに相談しよう。」ということになり、お坊さまに、相談に行きました。お坊さまは竜骨を入れた箱を持ち、鷹匠橋の上でお経を一心に唱えて、お祈りをしました。すると、どうでしょう、しばらくして雨が降ってきたそうです。ありがたいことですね。





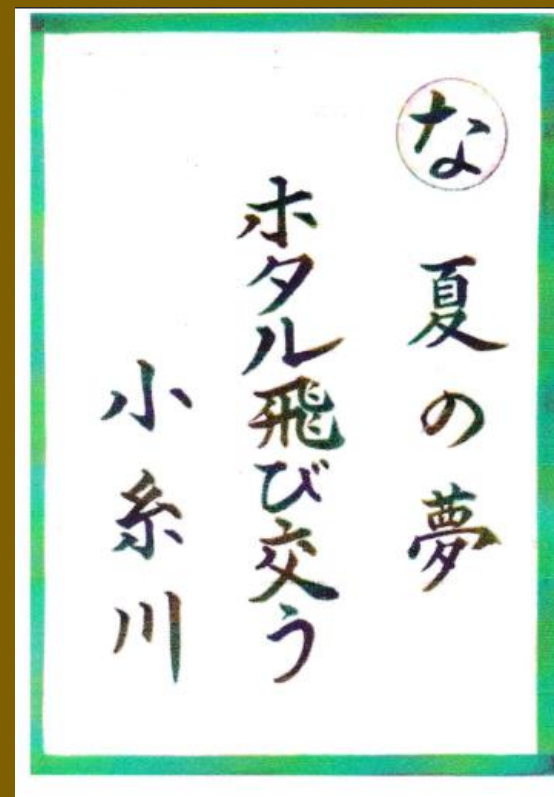
「大庭鷹匠橋」は天神橋よりひとつ上流の橋である。欄干にはトンボとりをする子どもたちの彫刻がある。この橋は以前鷹匠橋とも「聖（ひじり、寺院に所属しない僧のこと）橋」とも呼ばれていた。どこにどちらが住んでいたのか不明だが、そんな時代もあったのだろう。藤沢市内に「鷹匠橋」と呼ばれる橋が三つもあるそうだ。まぎらわしいので上に「大庭」をつけざるを得なかった。これは現代の知恵である。鷹匠の仕えた殿様が、大庭景親か太田道灌かそれとも知るすべはない。ただ、眼光のするどい大鷹が、鷹匠の掌から飛び立って、大庭耕地の稲穂をかすめて獲物に襲いかかる光景を想像するだけでも、一瞬古い世界に引き返したような気がする。





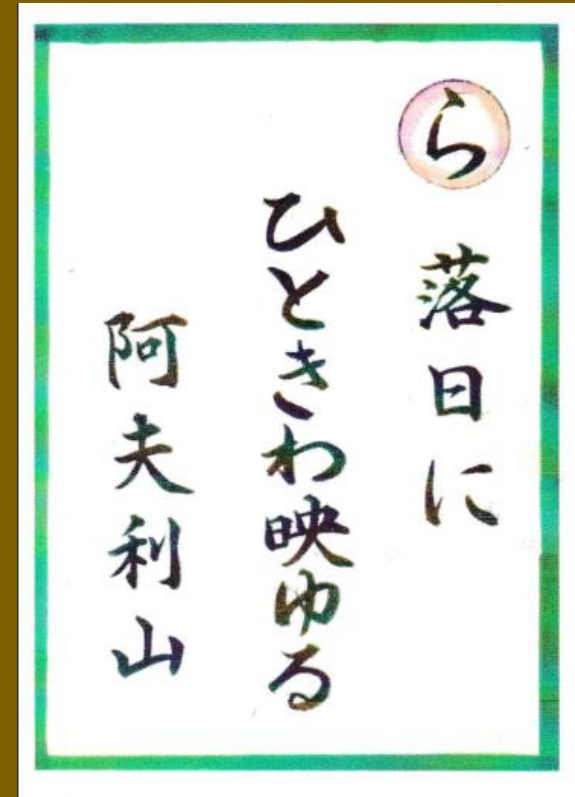
大庭東町にある真言宗の寺院で山号は稲荷山。創立は文和年間（1352～56）頃で、大庭神社の別当をしていたらしい。この寺には相模国準四国八十八箇所34番の大師石像が安置されている。
 近くの聖ヶ谷（ひじりがやと）で念仏聖が小庵を編んだという伝承があるが、成就員との関係は定かではない。





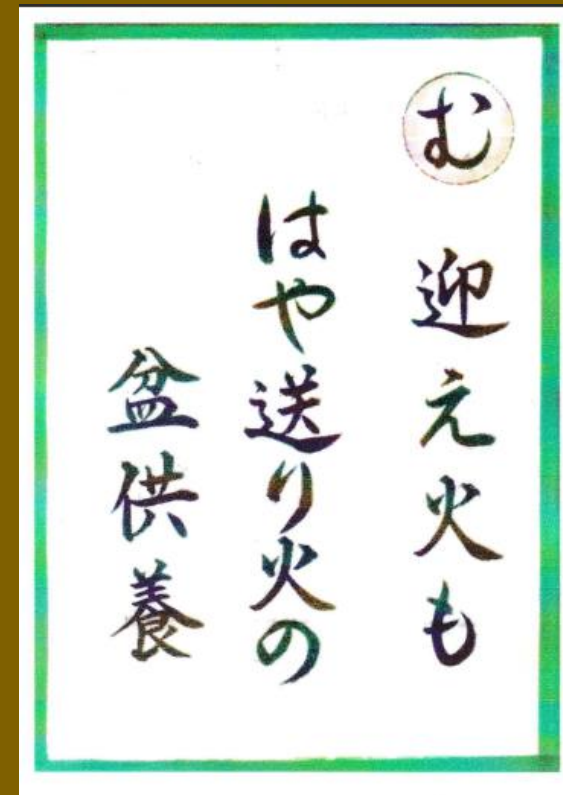
遠藤地区から流れ出て、大庭城址の東側で引地川に合流するあまりにも短い流れ、小糸川。かつては丘陵の畑をうるおし、ホタルの乱れ飛んだ素朴な流れだった。今は護岸ががっちり築かれてしまい、その時代の面影はないが、それでも街中の流れは人の心を癒す。大庭にホタルを呼び返したい！





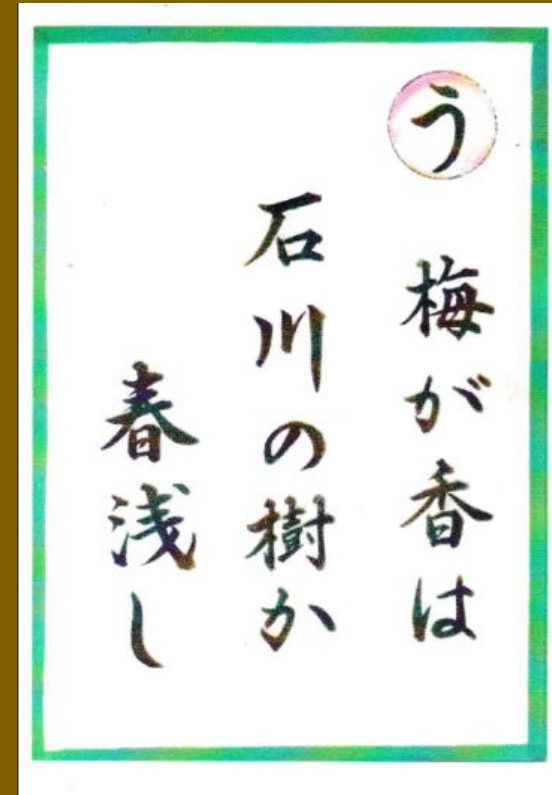
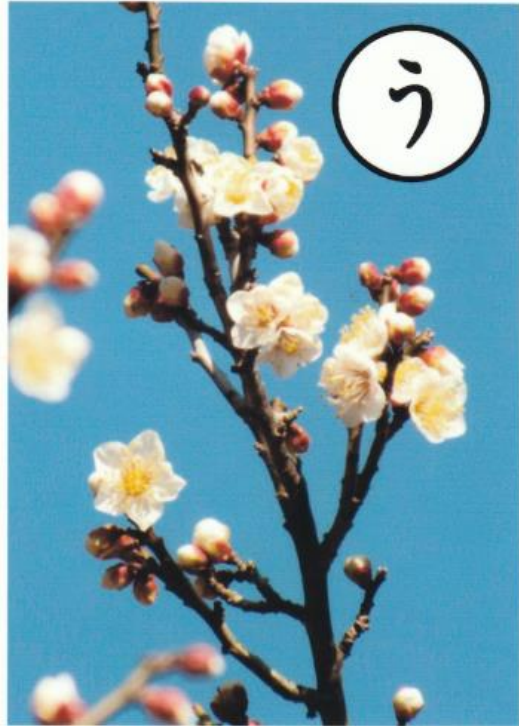
阿夫利山。いわゆる大山の別名である。丹沢山系の東端にそびえる三角錐をした美しい山で、湘南ライフタウンからは西側の視界が開けた場所であれば、天候条件さえ整えば何処からでもよく見える。天平勝宝年間（747～757）に名僧良弁により開山されたと伝えられるからその歴史は古い。雨降山とも呼ばれ、雨乞いの神として農民の信仰を集めてきた。グルメ時代の今日にあっては「大山豆腐」のふるさととしての方があるいは有名かもしれない。最近では気象条件の変化のせいであろうか？夕暮れ時に、西の空が一面の夕焼けに染まる時がある。そんな時、夕焼けの中に浮かぶ大山の美しいシルエットは、やはり昔ながらの信仰の山としての姿を彷彿とさせてくれる。





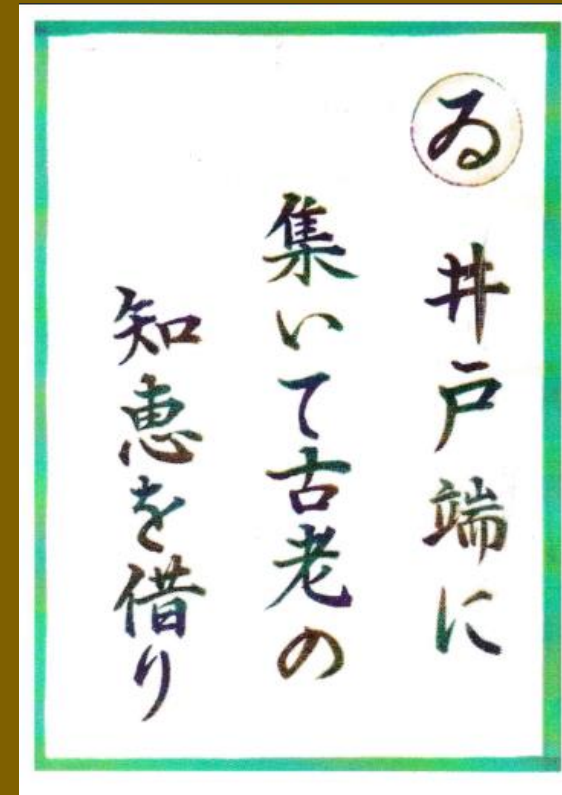
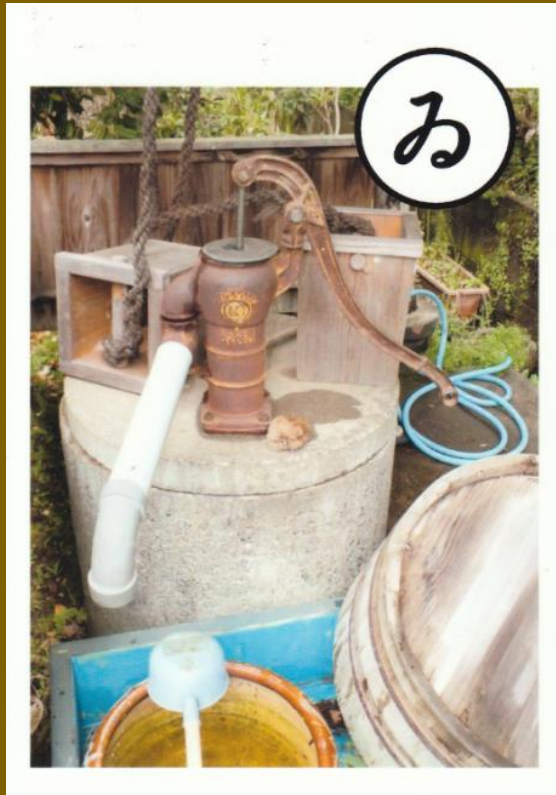
盆の行事は、先祖の魂をお迎えすること、七月十五日前後の一連の行事である。湘南大庭地方では、旧盆と言われ、一ヶ月遅れの八月に行われる。行事としては、聖霊を迎える準備として、墓の掃除や霊を迎えるための道草狩りをし、水辺に自生するマコモで敷物を編んで、表座敷に盆棚を造る。十三日夕方に門口などで「迎え火」を焚いて聖霊を屋内の盆棚に迎え入れる。十五日は、仏様が買いものに行く日と言われ、お弁当にぼたもちを作り、乗り物として、ナス、キューリで馬を作る。馬の餌は采の目に切ったナスで、里芋の葉に乗せて、乾かないように、ミソハギの花で打ち水をする。十六日の朝は門口などで「送り火」を焚いて聖霊を極楽浄土に送る。





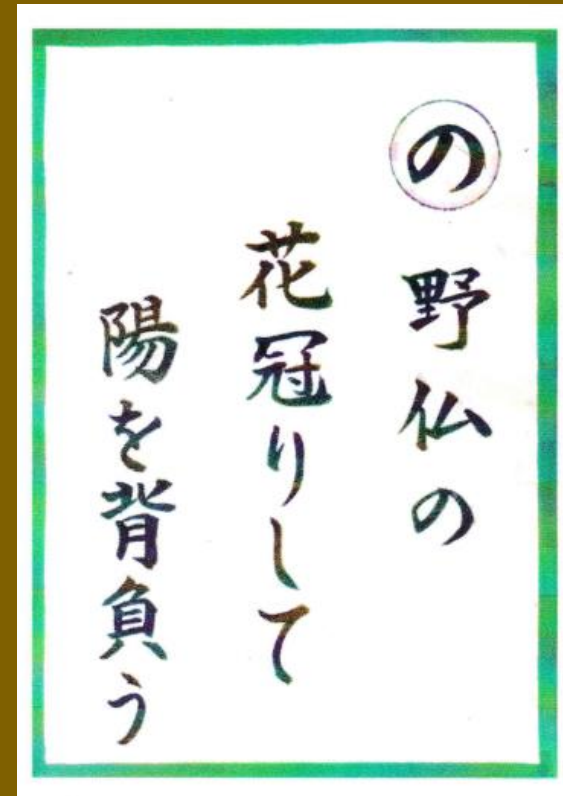
梅の花は、寒冷に耐え、早春百花に魁けて端正な五弁の花をひらき、その花容は気品にたけ、清香を放つところから、古来からもっとも親しまれてきました。石川の梅は、湘南大庭地区の北に隣接する石川地区の角田宅にある梅の木が特に有名です。臥龍梅と呼ばれ、樹齢300年を越す豊後梅の老木です。梅の木は自然の樹林を長年にわたり手入れされ、圧縮化、簡素化し、様式化された作品となっており、「かながわ銘木100選」に選定されています。開花期には多くの梅見の人々が訪れます。大庭、遠藤、石川地域には、現在も梅林が点在し、梅干を生産販売しています。





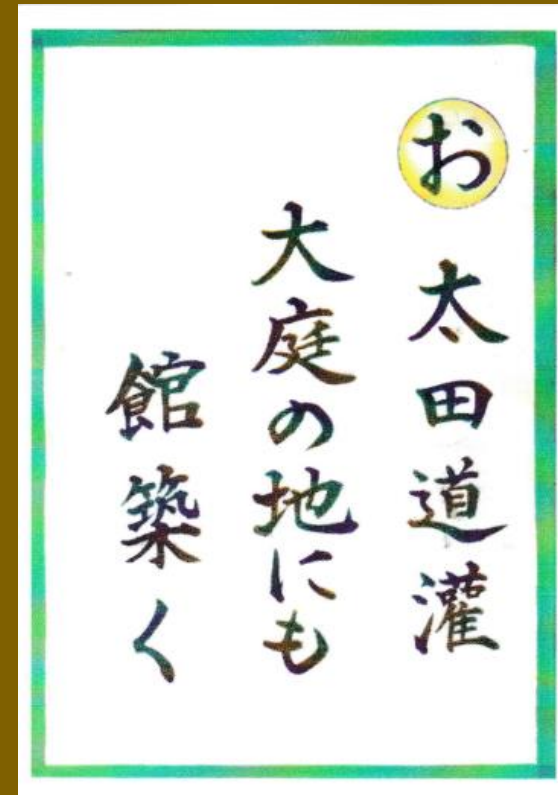
昔は集合井戸や共同の洗い場に、女性が集まって仕事をしながら世間話や噂話をしました。その頃のお嫁さんは、立ち話等をしていると姑から油を売ってなまけていると叱られたものです。したがって井戸端や洗い場が、お嫁さん達の唯一の社交の場でもあり、開放される場でもありました。最近まで、冠婚葬祭は、家で行うのが普通で、その時には近隣の人が集まって取り仕切る風習がありました。お客様のご馳走を作るのは、女性の分担で、働きながら学ぶ事は、土地の生活習慣であったり、体験から生み出されたものが多く特に若いお嫁さんには、すぐ役立つものでした。





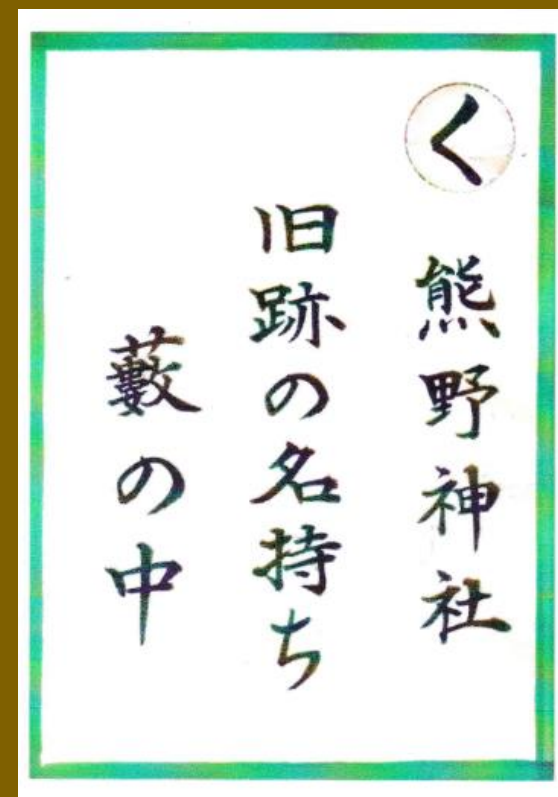
昭和40年代、この湘南大庭地区が開発されるまでは、道端などいたる所に野草の花が咲きそろっていた。それを手折り、お地蔵さん、道祖神に花を上げ、頭に花冠りをつくって家時につく幼い頃が思い出される。





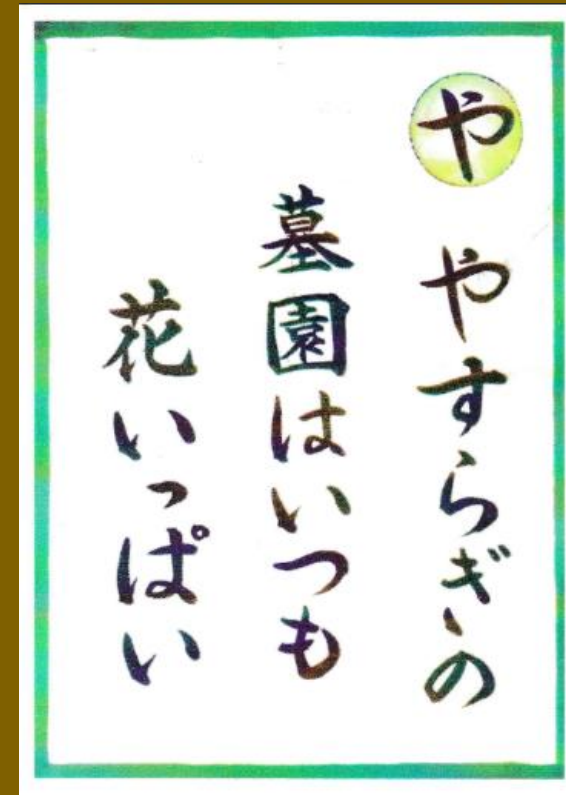
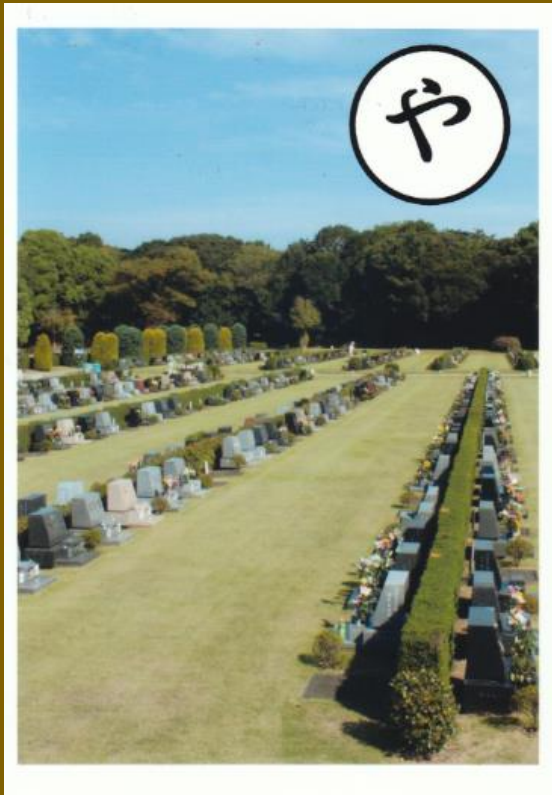
扇谷上杉氏の家宰であった太田道灌が江戸城を築いたことは有名だが大庭城にも彼の手が入っていると言われている。鎌倉源氏政権が成立する直前まで、大庭景親がこの地を支配していたそうだが、頼朝に敵対したために亡び、さらの源氏—北条と続いた鎌倉幕府が終わって室町幕府の関東管領扇谷上杉氏の持城になって大庭城を改築したのが、太田道灌だと言われている。今に残っている空堀がその時掘られたものだとの説もある。この城も、後に北条早雲に攻められ落城しほどなく廃城となったようだ。





湘南ライフタウンの南端に横たわる丘が長坂山であり、今は芙蓉カントリークラブのコースになっている。その北麓の台の集落に熊野神社が鎮座している。深い竹藪の奥の苔むした石段を登ると小さな社殿がある。この神社が大庭神社の旧跡だと言われている。標柱が立っている。現在の大庭神社はそこから北東に数百メートル離れた引地川の東側にあるが、延喜式内相模国13座のひとつである大庭神社が昔の集落の伸長などで転々としたのかもしれない。が、それとは関係なくこの神社に参拝すると自然と頭が下がる。そんな雰囲気を持った社だ。

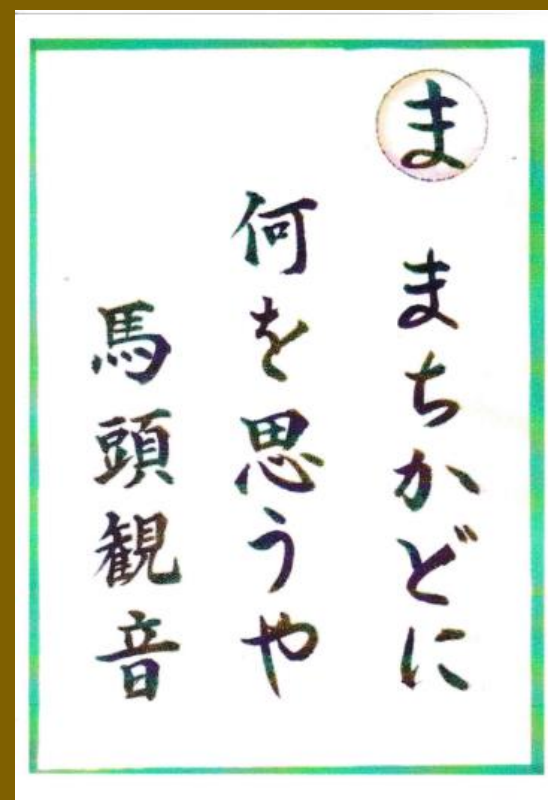




みどりいっぱいの墓園は正式名は大庭台墓園です。藤沢市がS42年に基本計画をたて、S45年から募集を始めました。S61年には市営斎場も開設されました。H5年には26,366区画の整備も終え、貸付も完了しています。その後は3階建ての立体墓地も建設され、1,252区画（H13.6現在）が追加貸付されています。総敷地面積は36.91ヘクタールです。

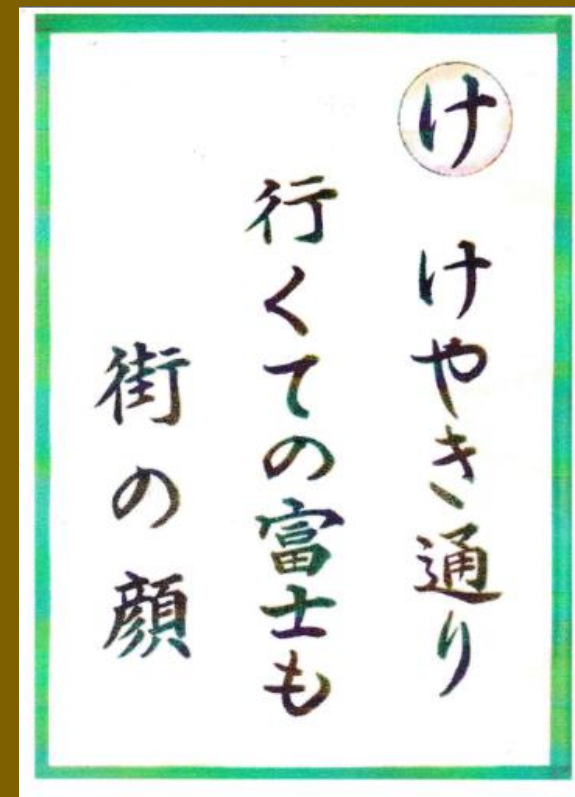
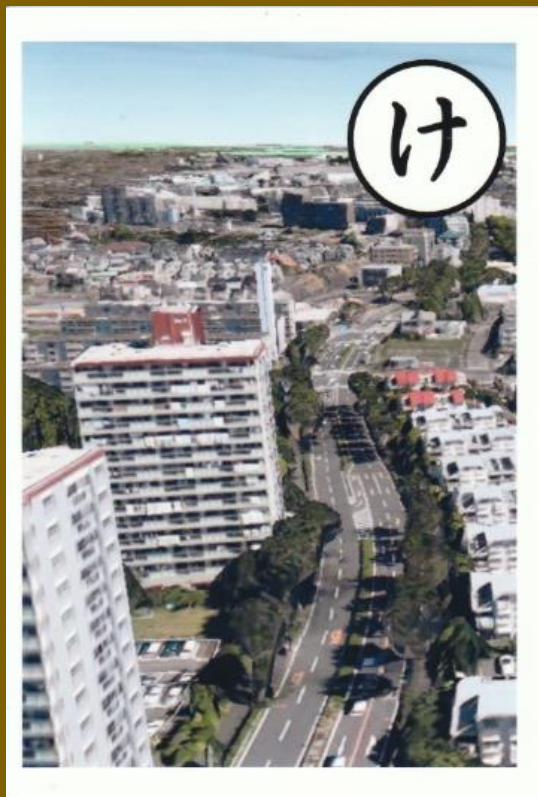
公園墓地になっている為か、墓参の人はもちろん散歩・ジョギングと人々の出入りも多く、いつも掃除がゆきとどき、近隣の人々のいこいの場でもあります。藤沢市の広域非難場所に指定されています。





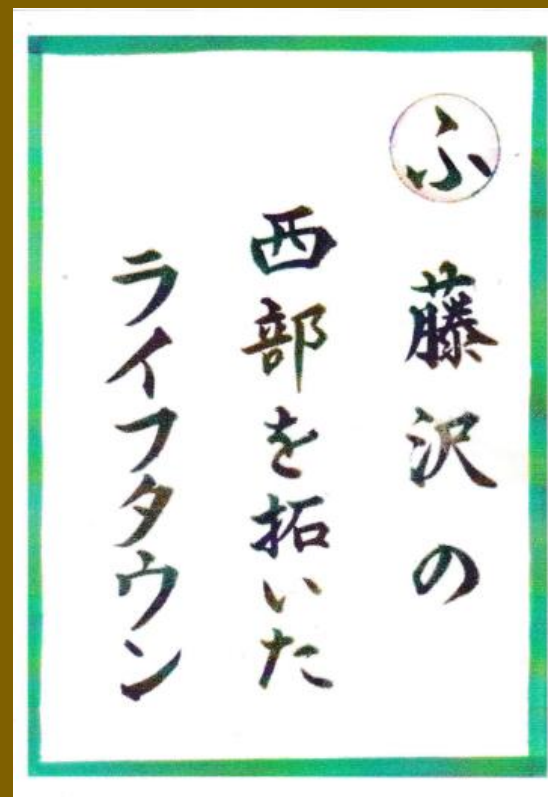
馬頭観音。仏教6観音のひとつで人身馬頭の姿は諸魔をくじく威力を表したものらしい。その後民間信仰により、労働力としての馬への無病息災祈願、さらには旅人への安全祈願へと風化していった。最近では、よほど田舎にでも行かなければ、その姿を見かけることはない。この地区で観音様を目にすることができるのか？答えは「Yes」。勿論人身馬頭の立派なお姿ではない。方形の石碑にただ「馬頭観世音」の文字が刻まれただけの素朴なものである。そこには庶民のささやかな願いが込められている。それにしても現代人はゆったり歩くという基本動作を忘れてしまった。目的地に向かってただひたすら急ぎ足で歩く。さらには、車を利用する。何故そんなに急ぐのだろうか？観音様もそのスピードについてゆけず「安全を願う暇も無い」と苦笑いしながら、身を隠してしまったのかもしれない。





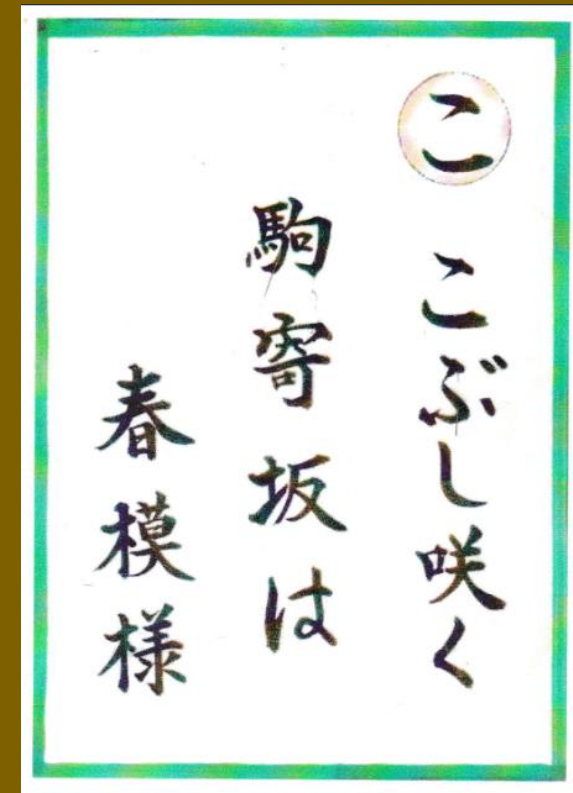
湘南ライフタウンの中央を貫く大通りが、中央けやき通りだ。この通りは二番構公園から南方は、ほぼ南北に通っているが、北方は、東西に方向を変えて通っている。北東よりの終点に向かって進むとやがて真正面に大山（雨降山）と丹沢山系が見えてくる。その左側に目をやると、日本の象徴「富士山」がくっきりとそびえている。四季様々な姿になる富士山は、日本人の心の山だが、この街にとっても、まさに街の顔だと言える。





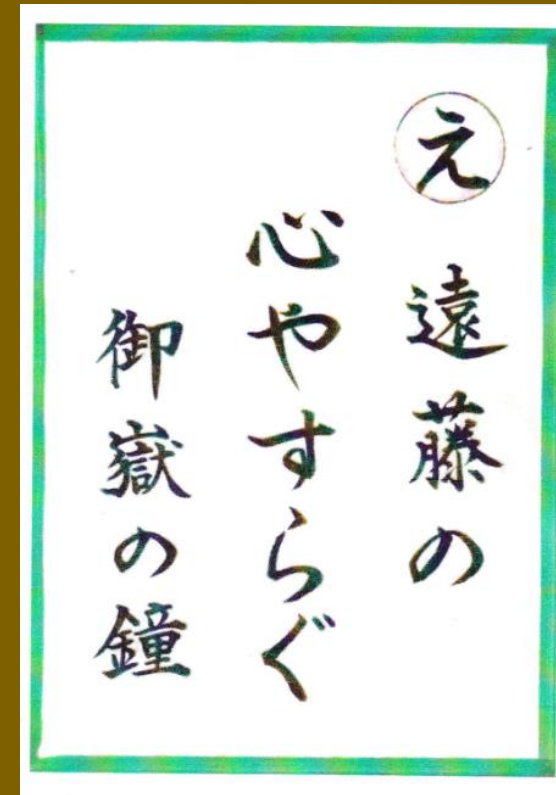
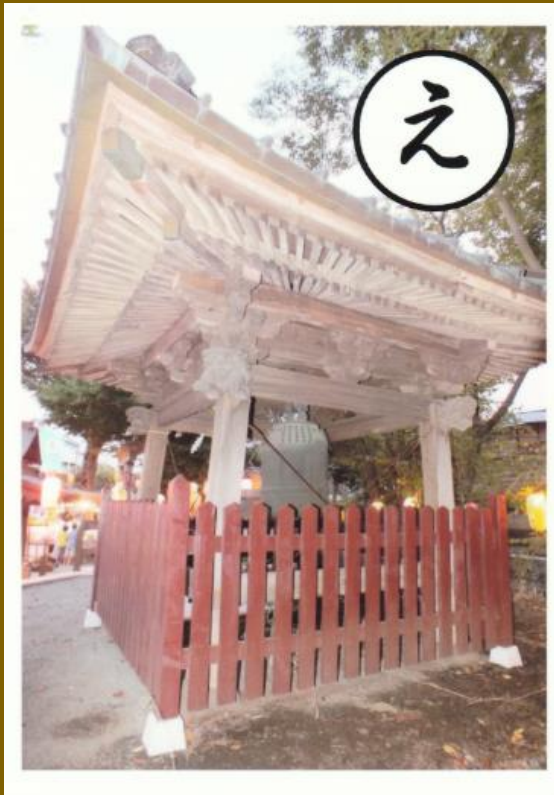
大庭を中心に、遠藤や石川の一部を加えた西部開発計画は、総面積百万坪、藤沢市単独の巨大プロジェクトとして、昭和四十二年にスタートした。この決断は時代の要請に応じて理想的な市街地造成をすすめ、極力乱開発を防止するためであった。市の意図をよく理解し協力した大多数の地権者によって、無謀ともいわれたこの単独事業も幾多の試練を経たものの、四半世紀に及ぶ努力の末に、今見られるような街に生まれ変わった。田畑や山林の姿は失われたが、変わって期節をいろどる街路樹や公園の緑が、家々をそっと包み込んでくれているし、きれいな空気と青い空は昔のままである。とにかく湘南ライフタウンは愛の手づくりの街である。





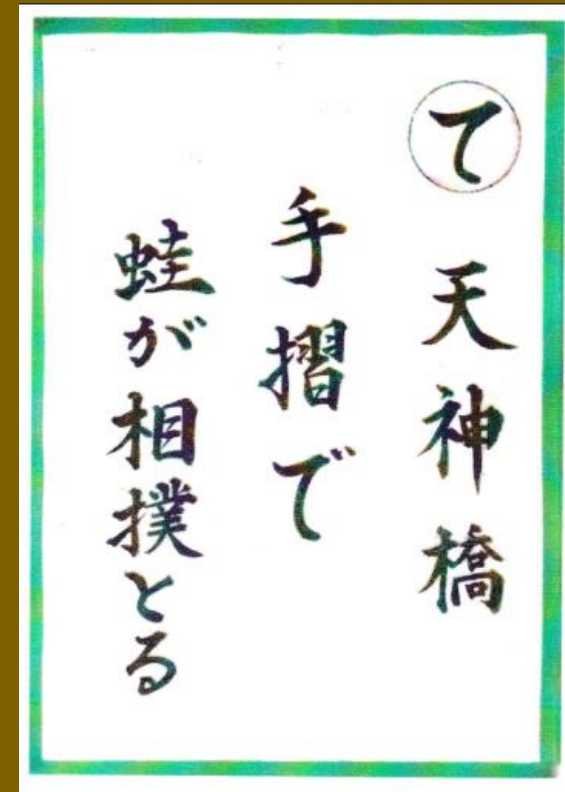
県道藤沢厚木線からライフタウン中心の二番構公園を結ぶ急な坂道が駒寄坂です。沿道には駒寄小学校、五反田保育園、駒寄市民の家、頂に保健医療センターがあります。春には街路植えのこぶしの白い花が坂道を彩り、花ビラが舞い落ちると、かわいい新入生の声がひびきわたります。





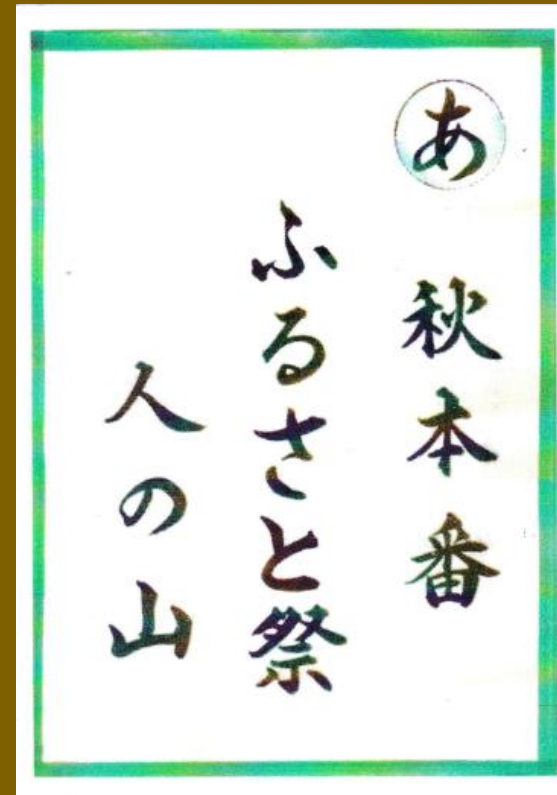
御岳神社は、遠藤村の総鎮守社で、ご祭神は日本武尊で他に六柱が合祀されている。社殿の西向きはめずらしく、三十五の石段を登ると富士山を見ることができる。鐘は、第二次世界大戦の折供出されたが、昭和二十六年に買い求められて、現在も美しい音色で人々の心をいやしている。かつてこの神社の御神輿は、茅ヶ崎海岸で七月に行われる浜降り祭に参加していたが、御神輿が年代を重ねたこと、御神輿を担ぐ若者がいなくなってしまう、ここ数年参加していないのが残念である。





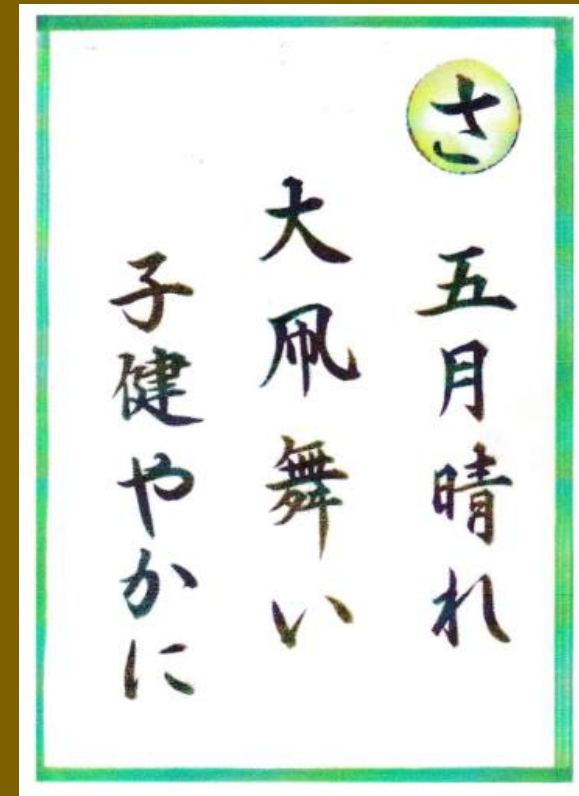
大庭神社は通称天神様。菅原道真公と大庭景親さんが合祀されている。由緒ある神社だったので、戦前は郡長さんが馬車に乗って遙々お参りに来た。引地川にかかる、木の板を並べたような天神橋の上で、馬車の轍（わだち）がゴロゴロ鳴ったのを思い出す。山の上の天神さまでは鐘の音がゴーン、ゴーンと出迎えた。いまはコンクリートの橋になって、蛙が相撲をとっても揺れることはない。ましてや大水で流されることもない。





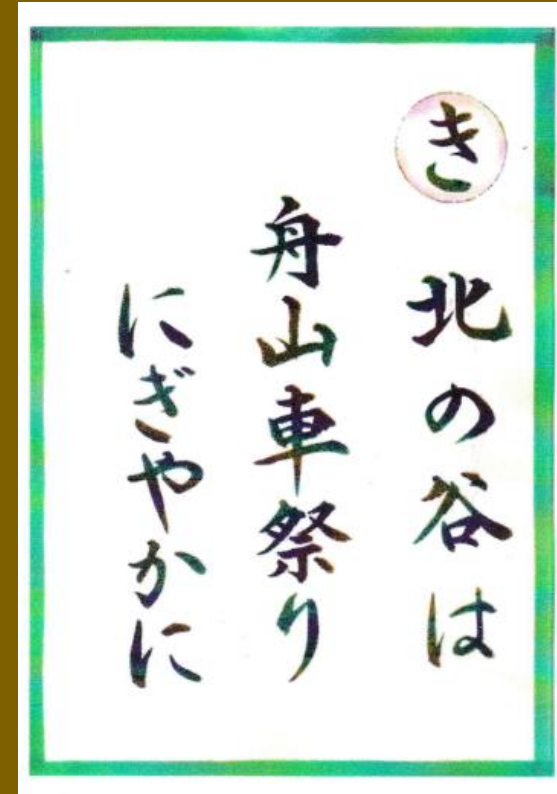
「ふるさと」「まつり」いずれも人に郷愁を呼び起こす言葉。人はこの言葉に誘われて集まってくる。この地で生まれ育った人も、そうでない人も。それぞれの思いは違っても集まってくる。そう理屈をつける必要は何も無い。今暮らしているところが「ふるさと！」そこに伝わるまつりが「まつり！」そして何よりそこで触れ合う人は皆仲間！若いも男も女もみんな仲間！だから「湘南大庭」はわがふるさと！「ふるさとまつり」はわがまつり！





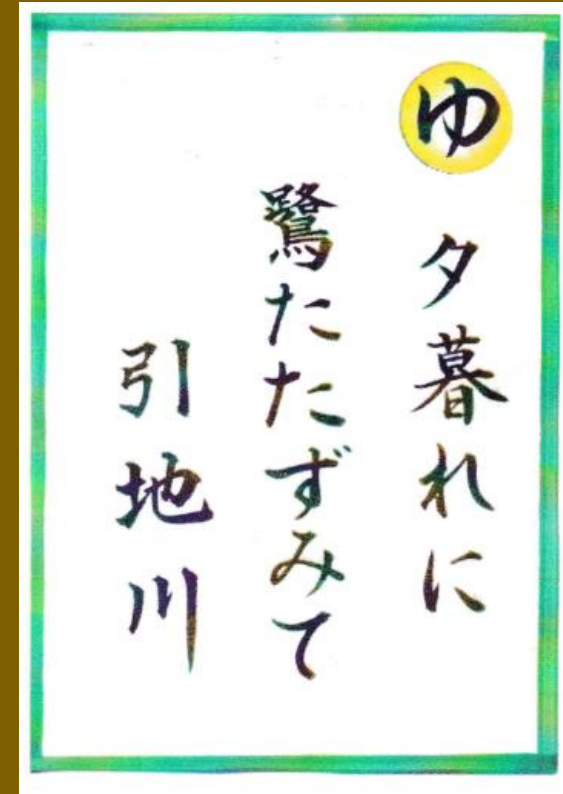
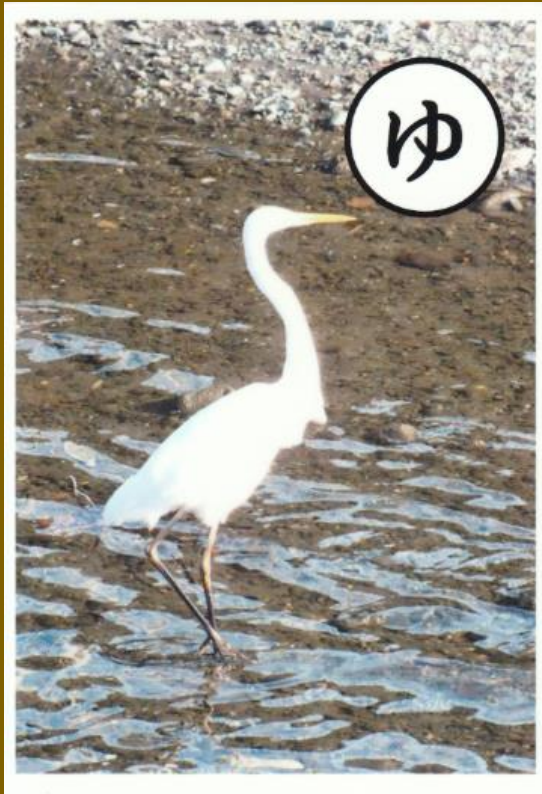
藤沢市独自の凧として、男の子の出生を祝って、家の頭文字をとる字凧、家の家紋をえがく紋凧が特徴の凧を端午の節句に揚げたと伝わっています。形はごく単純で普通の竹と和紙を使って作った正方形のものに二本の荒縄でシッポをつけます。グァーンとうなり声をあげて上がる凧は壮観で、五月には大庭遊水地で地元の人達が揚げる凧を見ることが出来ます。





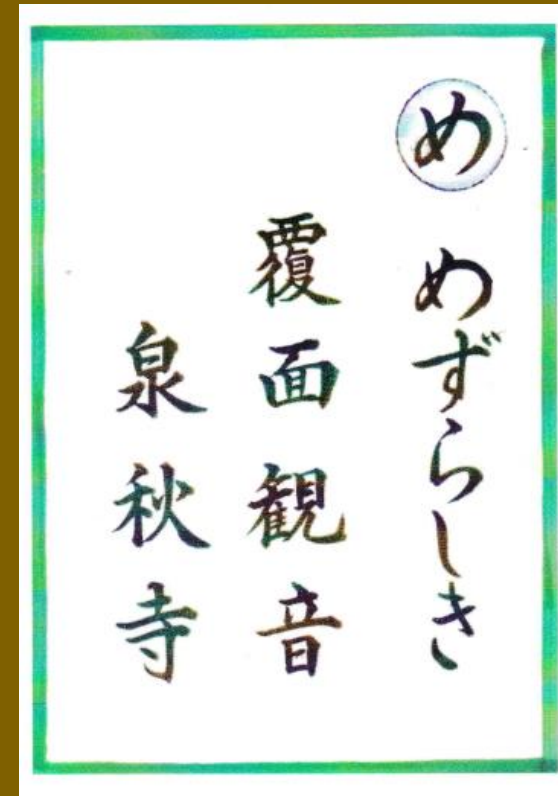
北の谷の熊野権現の例祭は9月に行われます。山車は舟形をしており独特なスタイルで舟地藏をイメージされます。お囃子は江戸時代から伝えられているもので、笛、太鼓など賑やかで祭りをはなやかに盛り上げます。





湘南ライフタウンの東の境界を流れる引地川。大和市の「泉の森」を源とし相模湾にそそぐ総延長21kmの川である。昔から、この流域の人々に数多くの潤いと恵みを与えてきたことであろう。ここ数年の間にここ湘南大庭地区は勿論、海岸までのかなりの部分が遊歩道として整備され、皆に愛される場所となった。この川にはいろいろの鳥達が集まる。それぞれに個性があり見ていて飽きない。しかし、何ととっても風情のあるのは「鷺」ではなかろうか。夕暮れ時に、水辺にたたずむ鷺の姿は何故か心を穏やかなものにしてくれる。「あなたも鷹匠橋から天神橋あたりを散歩してみませんか？」必ずや、鷺との出会いがあり、その姿はゆったりとした時の流れの中にあなたを浸してくれるだろう。





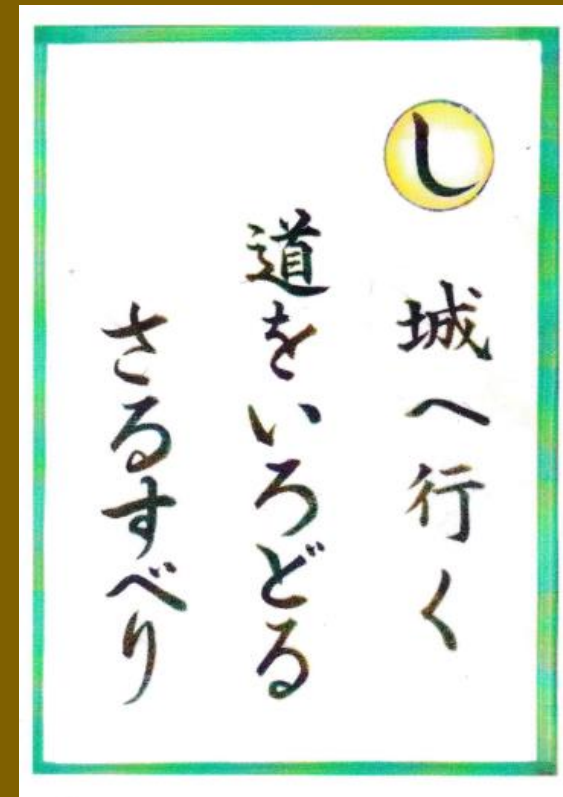
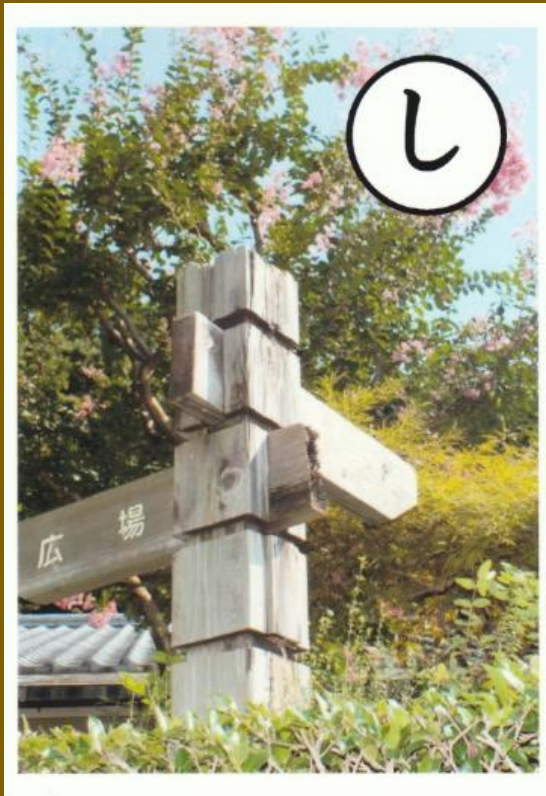
元は大庭城下にあった泉秋寺が今は大庭隧道をくぐって湘南ライフタウンに入ると、すぐ左側の高台に移った。この寺の本尊の聖観音は俗に覆面観音と呼ばれ、その顔の半面を覆っている。この由来は、昔、この門前を乗馬で横切る武士は必ず落馬したので、これは観音様の威光が高いことから起きるものであり、それを和らげるために、覆面をしたところその難がなくなったと言われている。





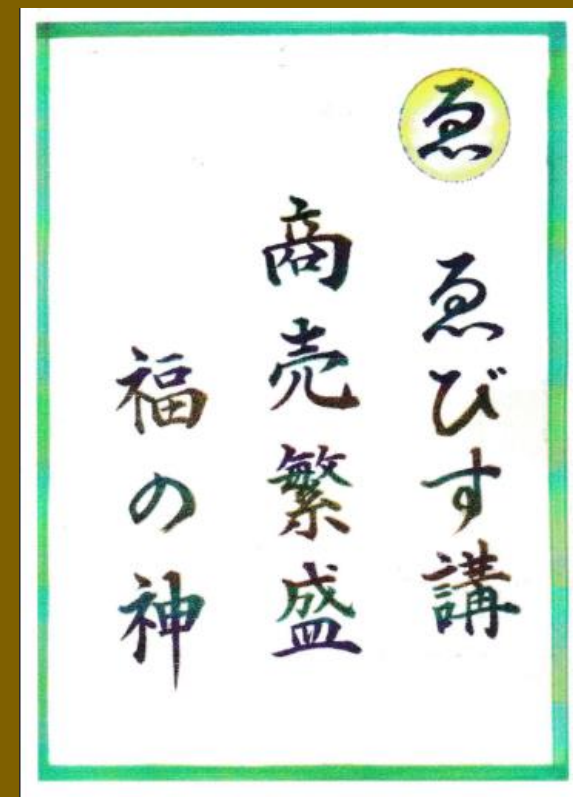
御厨の原義は神前への供え物と調達する建物。それが鮑、鯛などの特産物を納める神領を御厨と言うようになった。大庭御厨は平安時代末にこの地を支配していた鎌倉権五郎景政がこの土地一帯の私領を開発し伊勢内宮に寄進した。この大庭には、城下、台谷、小糸と三神明社があり、昔の面影を神明社は芙蓉カントリークラブ内にある台谷神明社のみになってしまった。





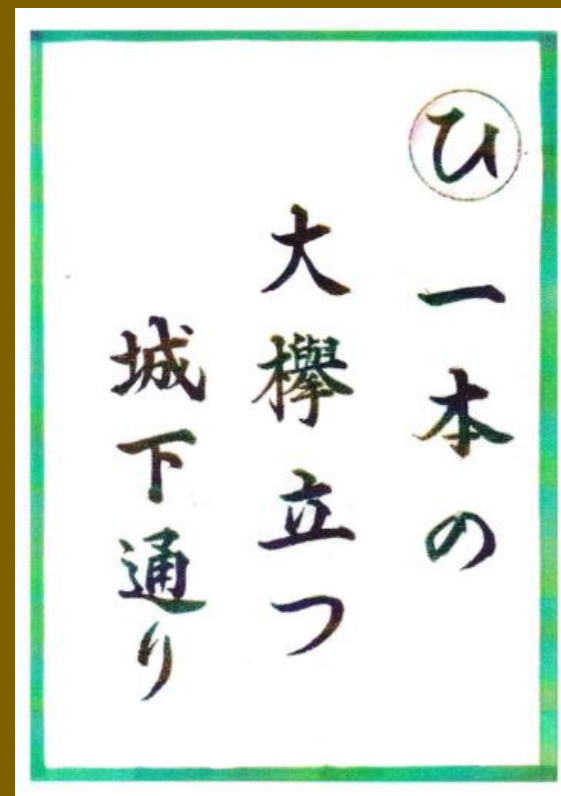
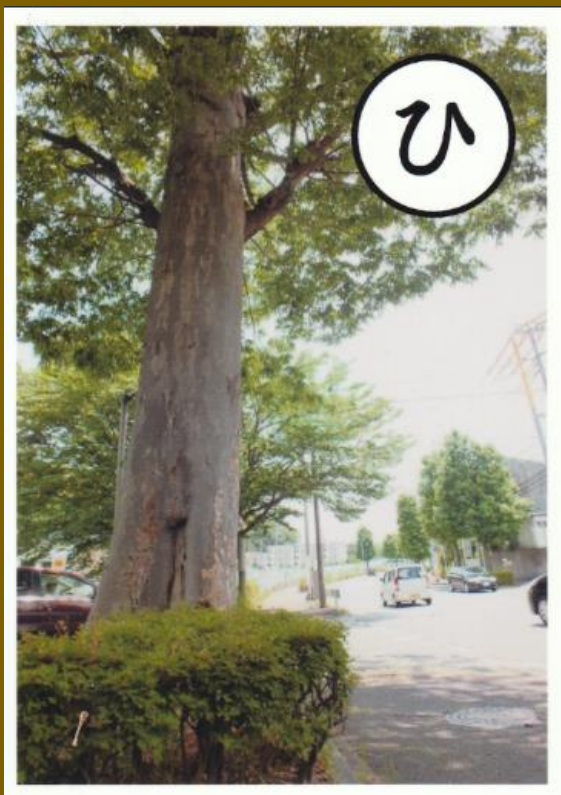
夏－ 城址公園の入口に通ずる歩道へ、頭上から蝉の声がなだれ落ちてくる。ギラギラと照りつける太陽、燃えるかげろう。その中でピンクの花房を精一杯開いて道を縁どる百日紅は、健康な夏を見事に象徴する。城へ登る石畳の道で一汗かいても、のぼり切った公園には緑の木陰が用意され、樹林でひやされた風が心地よく汗を拭きとってくれる。夏もまたよし城址公園である。





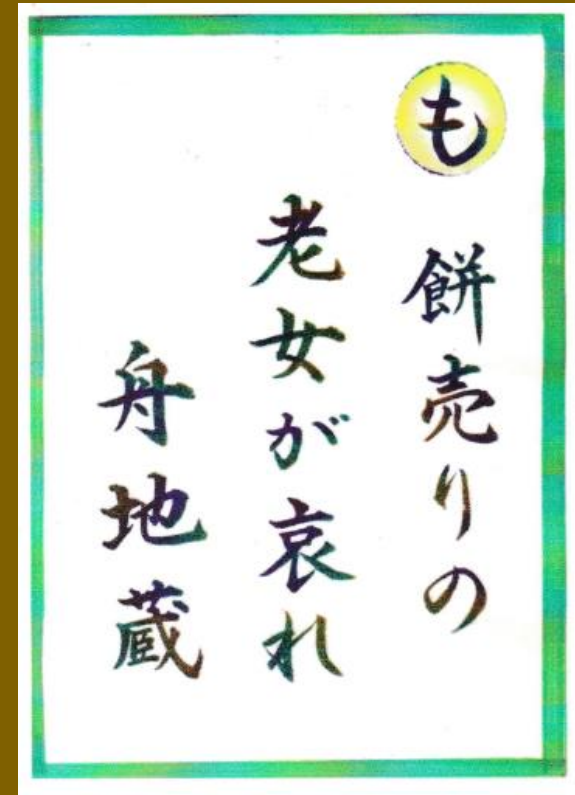
エビス神を祀る行事で、正月二十日と十一月二十日を恵比須公講と呼び祀っている。講とは呼んでいても家単独行事の性格が強い。恵比須様は商売繁盛の神様で知られているが、江戸時代に入って農村部でも盛んになり、この地方では、恵比須像を神棚に据え豊作を祈り、十一月には、お頭つきの魚やお神酒を供えて感謝した。また一升枀にお金や財布を入れて供え感謝する風習がある。「恵比須膳」と言っ神様にお膳を供える時、常は、膳の木目を目通り（横）に備えるが恵比須膳は縦にした。十一月の恵比須講には、商家で縁起物としてミカンを配り大売出しをした。この日に、家の使いに行っ、ミカン一個をもらうのも、子供の楽しみのひとつだった。





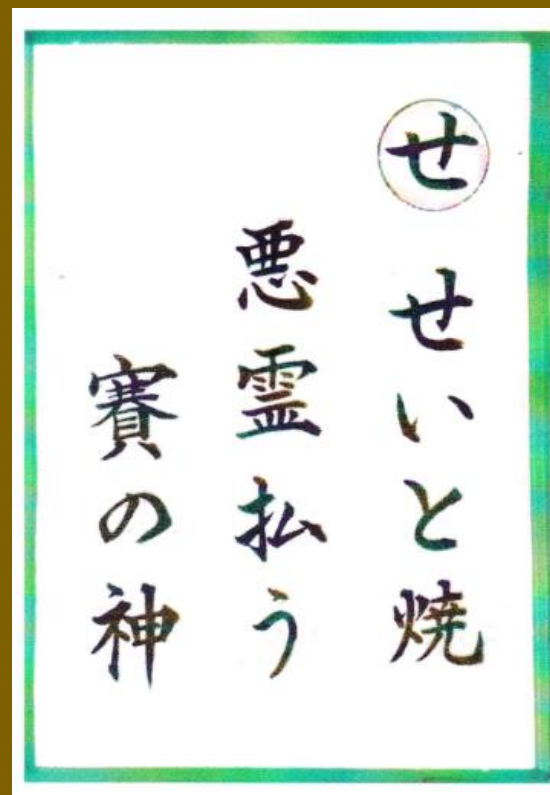
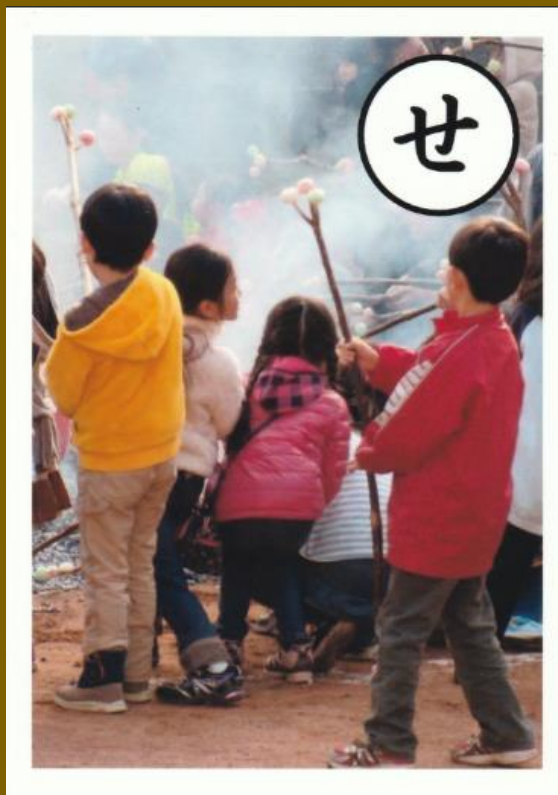
舟地藏の交差点から城下通りに入ると、道が登りになる所の右側に大きな樗が一本立っている。樹齢は定かでないが根回り3mほどの大木で小糸川の土手を守っていたのではないかとと思われる場所に立っている。昔から小糸の集落の人々の営みを見守って来たのではないだろうか。この先もずっと元気でいてほしい。この土地のシンボルとして。





1512（永正九）年、北条早雲は大庭城攻めを行った際、城を囲む水に悩まされたが近くの稲荷でボタ餅を売っていた老婆に「堤を切れば沼の水は干上がる」と教えられたが秘密が漏れるのを恐れその老婆を殺してしまった。
この地の村人が老婆の死を悼み舟に乗った地藏をたて、まつるようになったと言われている。

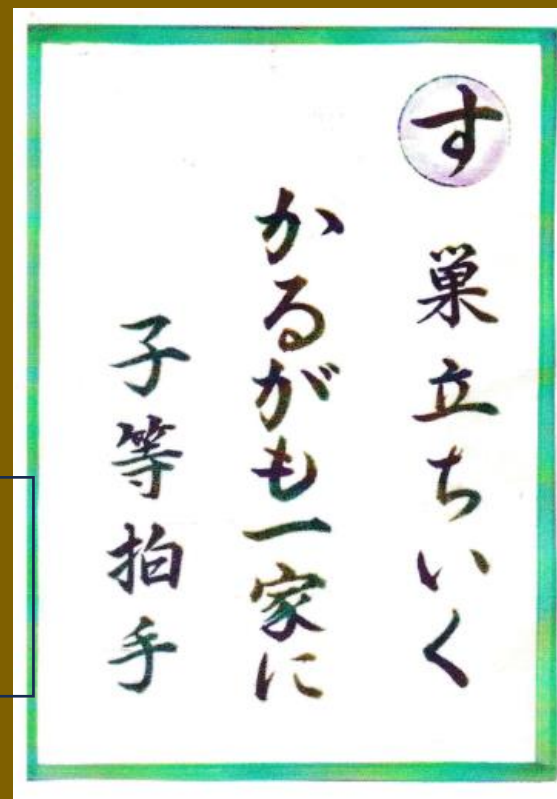
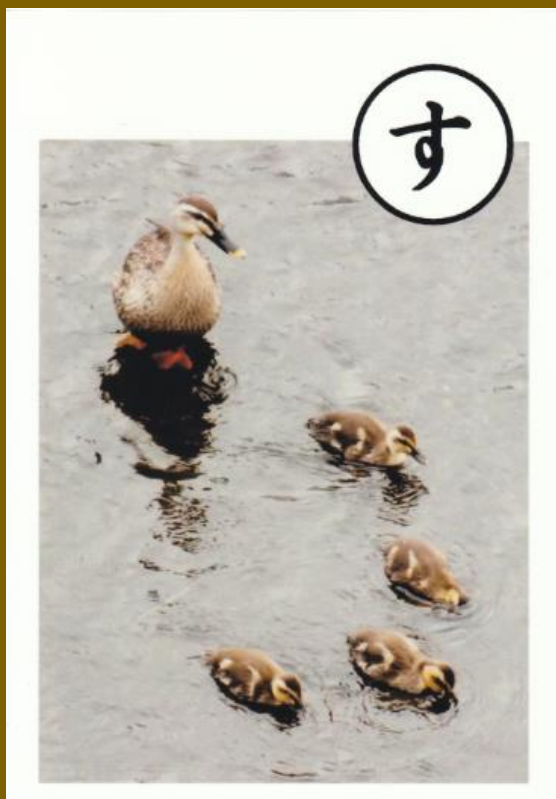




さいと焼、せいと焼（さいと焼がなまったものではないか）どんど焼と地方によって、呼び方はいろいろであるが、行事としては大差はない。

正月の十四日に集落の道祖神のところで、各家から集めた正月飾りをはじめ神事に使ったもの等と石ころを一緒に入れて、おたき上げをし、その燃え方で一年の幸運を占った。（石ころを入れるわけは？？？）この火にあたり、火で焼いたダンゴ（餅）を食べると一年中病気にかからないと言われた。また、正月二日の書初めを火にくべて、高く舞いあがると字が上達するとか、さいと焼きのダンゴをさした三叉のこげた棒を持ち帰って、門口に立てておくと、災い除けや、虫除けになるとも言われた。





カルガモは、ガンカモ科の鳥で、全長60センチ位、雌雄同色で、頭は暗褐色、背は褐色である。日本でもほぼ全国的に繁殖し留鳥である。沼地や川、池などに住み、入り江、内湾などにもいる習性があり、都会地の公園の池にも秋冬には多数生息する。グエッツ、グエッツと鳴く。湘南大庭市民センターと大庭中学校との間にある藤沢市裏門公園は、野鳥観察のできる調整池を兼ねた公園で、ここにはコサギ、コチドリ、カワセミ、セキレイ等とともにカルガモも多く生息している。また、この調整池に続く小糸川でも姿を見ることが出来る。裏門公園でのカルガモ一家の姿は、生い茂る草木の影で観察台から見ることができないが、このカルガモは静かに巣立っているであろう。歌のなかで巣立ちゆく姿に拍手しているのは勿論、人の子供であってカルガモの子等は親の後ろにくっついて行くのが精一杯で、手を叩いたりするゆとりはない。



完

